

三重大学国際交流センター

紀 要

第 17 号 (留学生センター紀要より通巻第 24 号)

目 次

研究論文

介護老人福祉施設に就労する技能実習生についての一考察

— 接触場面の視点から — 神 山 英 子 (1-14)

Public Performance and Spiritual Uplift: Seki *Matsuri* and the Flow

..... Brian James Mahoney (15-26)

調査報告

留学生と地域の人々との盆踊りを通じた国際交流と地域の国際化

— アンケート調査から — 福 岡 昌 子 (27-40)

コロナ禍での授業形態にかかる学生の意見調査：

ハイブリッド授業、オンデマンド授業、リアルタイムでのオンライン授業

..... 正 路 真 一 (41-53)

実践報告

三重大学ベトナムフィールドスタディ 2020 の実施と今後の展望

..... 松岡知津子・奥田久春・Cao Le Dung Chi・Le Thi Hong Nga (55-67)

日米大学生による英語と日本語の Virtual Exchange 型会話練習

..... 正 路 真 一 (69-80)

三重大学国際交流センター紀要 [投稿規定] (81)

三重大学国際交流センター紀要 [執筆要領] (83)

執筆者一覧 (85)

編集後記

三重大学国際交流センター

2022

研究論文

介護老人福祉施設に就労する技能実習生についての一考察 － 接触場面の視点から －

神山 英子

**A Consideration about technical intern trainees working in nursing care
and welfare facilities : From the point of view of Contact situations**

KAMIYAMA Hideko

〈要 旨〉

介護の外国人人材が増加し、多くの介護福祉施設で日本人職員と外国人介護人材が日本語でインターアクションをする場面が必須となっている。本稿では技能実習生に焦点を当て、現場でどのようなインターアクションが行われ、どのようなことが言語問題・コミュニケーション問題になっているのか、事前アンケート・インタビュー・自然会話録音・フォローアップインタビューという手順から得たデータから分析する。また、分析を通して、日本人職員が外国人介護人材にどのように日本語教育を含む指導等を行っていくべきかの提案をする。

キーワード：介護，技能実習生，接触場面，自然会話，日本語教育

1. はじめに

2008年の経済連携協定による外国人介護人材の受入れから始まり、2017年の技能実習「介護」、在留資格「介護」、2019年の特定技能1号という流れで外国人材の介護現場への参入が進んでおり、外国人介護人材の勤務先となる高齢者介護福祉施設については、コミュニケーション活動が介護活動の中で極めて重要な位置を占めている職場である（立川 2013）。また、（公）日本介護福祉士会は、外国人介護人材受入に関する懇談会（法務省 2014）において、外国人介護福祉士にも日本語でのコミュニケーション能力を求めている。

そこで、外国人介護人材の中でも参入人数が最多である技能実習生¹が、介護福祉施設でどのような日本語を使ってコミュニケーション活動を行っているのか、そして、日本人職員にどのように評価されているのかを接触場面における談話分析の視点から考察し、介護現場における接触場面でのコミュニケーションの実態の一端を明らかにし、今後の日本語教育を含む指導等の提案をする。

2. 先行研究

2. 1 外国人介護人材への日本語教育やコミュニケーションについて

経済連携協定によるインドネシアからの介護福祉士候補者の受入れから、日本語教育に関する研究は、現状や課題に関する研究 (齊藤他 2013, 大関他 2014 等), 研修に関する研究 (登里他 2011, 登里他 2014 等), 専門日本語教育研究及び国家試験や学習支援に関する研究 (立川 2011, 遠藤 2012, 三枝 2012, 中川 2012, 野村 2014 等) 等が見られるが, その中でも, 大関他 (2014) は, 就労現場で行われているインタラクションに視点を持つ重要性を指摘している。

就労現場で行われているインタラクションに関わる項目として, 外国人介護人材のコミュニケーションに関する研究については, 高本 (2011) が EPA に基づく制度的な問題とともにコミュニケーションに関する問題を取り上げ, コミュニケーションについては単なる言葉の問題やミスコミュニケーションとして片づけてしまうのではなく, 文化の違いがコミュニケーションにどのように影響しているか, その可能性を慎重に見極め, 現場の日本人スタッフとケアワーカー両サイドの支援を行っていかなくてはならないだろうと指摘している。また, 立川 (2013) は, 介護現場で展開される談話は一般の談話と異なっており, その特性を十分にふまえた内容が求められると指摘し, 実際の介護現場で行われているディスコースを分析し, 特徴をとらえることが不可欠であると述べている。そして, 武内 (2018) は, 国家試験に合格したが施設を移籍または退職した外国人介護士を対象にインタビューを行い, 構造構成的質的研究法に基づいてその結果を分析し, 今後介護現場には様々な形態による外国人介護人材のさらなる参入が想定され, 多文化・多様性を内包する現場となることから, 対話に向かう態度の育成, そして対話しやすい環境は外国人で介護に携わる者だけでなく受け入れ側の日本人職員にも必要であり, 同じ現場に共生する構成員である一人一人の意識を養う必要があると指摘している。小川 (2018) は介護福祉施設でフィールドワークを行い, 外国人介護人材とともにある現場におけるコミュニケーションをめぐる課題を整理し, 外国人人材, 日本人介護職員双方に対して言語教育が果たせる役割をあらためて検討していく必要があると指摘している。中島 (2020) は, EPA 介護福祉士候補者にインタビューを行い, 日本語コミュニケーションの問題を追及し, 受け入れ側の支援が問題解決の打開策になると述べている。

上記のように介護の日本語教育やコミュニケーションについての先行研究は, EPA 介護福祉士候補者に対する日本語教育から始まり, 現場のインタラクションの検討が必要と指摘され, ディスコースの特徴を明らかにし, 双方への支援をする必要があるとされている。そこで, 本研究では, 現場でのコミュニケーションの実態を明らかにするため, 外

国人介護人材と日本人介護職員の会話の分析を行う。

2. 2 接触場面について

介護の現場に外国人が参入するということは、現場は母語話者と非母語話者間でインターアクションが行われる接触場面となる。接触場面は、Neustupný (1985 a) が端を発した用語であるが、特徴として以下の3つが挙げられる。

①第一は訂正(言語管理)であり、不適切さを軽減するために実施される言語活動に注目する。②言語使用の場、ディスコースに注目する。③文法外コミュニケーション能力に注目する。具体的には、社会文化的、コミュニケーション的、言語的な相互行為からなっており、それぞれがどのように関連し合っているかに注目する。

また、接触場面における「言語問題」について、「言語管理理論」では、コミュニケーション体系の1つである「規定規範」からの逸脱からはじまるとし、逸脱の主な要因に「外来性」を挙げ、外国人参加者(非母語話者)の規範と母語話者の規範には違いがあるとし、外国人参加者の規範の特徴に関して、①規範の不完全さ②母語の代替性(中間言語規範)③借用、母語からの干渉④規範の厳格さの4つが挙げられており(Neustupný 1985 b)、実際の問題分析のために「管理プロセスの5段階」として①規範からの逸脱②留意の段階③評価の段階④調整の段階⑤実施の段階という管理プロセスモデルを設定している(高 2016)。

3. 本研究の位置づけ

厚生労働省の「技能実習「介護」における固有要件について」によると、「介護固有要件」に「コミュニケーション能力の確保」として、1年目(入国時)は「N3」程度が望ましい水準で、「N4」程度が要件、2年目は「N3」程度が要件として挙げられている。

また、「実習実施者・実習内容に関する要件」に、「技能実習責任者」の選任、技能実習生5名につき「技能実習指導員」1名の選任が挙げられている。受け入れ前には技能実習計画の認定があり、その計画に基づいて技能実習指導員が技能実習生に日本語を使って介護に関する業務上のことを指導し、日本語教育も行っていくことになる。

そこで、本研究では、現在、外国人介護人材が社会的必要性に迫られて増加していること、介護の現場では接触場面の状態にならざるを得ないことから、「言語管理理論」の枠組みを引用し、日本人職員と外国人介護人材のコミュニケーションの基礎となっているそれぞれの「規範」を分析する。

また、介護現場での「言語問題」の実態については、言語行動における言語問題とコミュニケーション行動における言語問題から分析するが、本研究では、高(2016)にある言語問題と管理が、

(1) 言語行動における言語問題と管理としての文法や母語干渉等

(2) コミュニケーション行動における言語問題と管理としての態度・丁寧さ・断り・勧誘・謝罪・感謝などの発話行為等に分類されていることを参考に、介護現場での接触場面としての自然会話の分析を試みる。

4. 研究方法

2021 年 4 月から 12 月にかけて、複数の介護福祉施設で事前アンケート調査を実施し、その後、事前アンケート調査に基づくオンライン半構造化インタビュー、業務会話録音、オンラインでのフォローアップインタビューを行った。そのうち、研究として有益なデータが得られた 3 か所の介護福祉施設について、以下に記述していく。

調査協力施設は、いずれも介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）で技能実習生を受け入れている。施設 A は初めて外国人を受け入れる施設で、施設 B は技能実習生受け入れ前から日本人配偶者を中心に 7 年ほど外国人職員を受け入れており、施設 C は技能実習生受け入れ前から 5 年ほど日本人配偶者や家族滞在の外国人職員を受け入れている。尚、今回の調査では、対象となる外国人介護人材（技能実習生）について条件を合わせるために、来日歴は 2 年、日本語のレベルの指標となっている日本語能力試験のレベルは N3、そして就業時間内に日本語教育を行っていない施設に、調査を依頼した。

表 1 外国人介護人材（技能実習生）について

施設 A	ベトナム人 2 名（来日 2 年目・日本語レベル N 3）
施設 B	ベトナム人 3 名（来日 2 年目・日本語レベル N 3）
施設 C	ミャンマー人 2 名（来日 2 年目・日本語レベル N 3）

事前アンケートとインタビューの協力者は、普段、技能実習生と接し、指導的な立場にある日本人職員である。

4. 1 事前アンケート調査

技能実習生の仕事上の日本語について、「あまり意思疎通できない」項目が施設 A で 20 %、施設 B で 16.7%、施設 C で 12.5% だったため、どのように意思疎通が難しいのか、オンラインでのインタビューを打診し、それぞれの施設で承諾を得たので、実施した。

4. 2 事前アンケート調査に基づくオンライン半構造化インタビュー

表2 アンケートについて

	意思疎通できる	まあまあ意思疎通できる	普通	あまり意思疎通できない	全く意思疎通できない
施設 A 5名	0%	60%	20 %	20 %	0%
施設 B 6名	0%	50%	0 %	16.7%	0%
施設 C 8名	25%	50%	12.5%	12.5%	0%

アンケート修了後、約2週間前後で、「技能実習生に対して、日本語コミュニケーションで望むこと」についてオンライン半構造化インタビューを行った。事前アンケートで「あまり意思疎通できない」と回答があったことを伝え、具体的にどのようなことか調査をし、以下のような回答を得た。

・施設 A (日本人職員 5名)

- A 1, 日本語の助詞や副詞など意味が変わってしまうので、もう少し理解してほしい。
- A 2, 介護の言葉を理解しておいてほしい。
- A 3, 来日する前にコミュニケーションが取れるくらいの会話ができるように。
- A 4, 専門用語を少し学んでほしい。
- A 5, 日本の丁寧な話し方や敬語や話すときのマナーを知ってほしい。

・施設 B (日本人職員 6名)

- B 1, 来日する前から日本語を学習して来て欲しい。
- B 2, 学ぶ姿勢を持ってほしい。特に助詞や敬語が難しいです。
- B 3, 日本語力に関してはニュアンス的なところ(言葉の言い方や強さ)。
- B 4, 積極的に話をする・話を聞く姿勢を互いに持つことが必要。
- B 5, 個人差がとても大きく感じる。
- B 6, 日々の記録に関して、必要最低限のことを書けるよう覚えていただきたい。
- B 7, 専門的な会話ができるくらいの語学力が求められる。

・施設 C (日本人職員 8名)

- C 1, 日常会話は身につけてほしい (2名)
- C 2, コミュニケーションが取れるようになってほしい。
- C 3, 簡単な日本語はわかっているほしい。(2名)
- C 4, 仕事に入るまでに会話を理解するぐらいの日本語力を身につけてきてほしい。
- C 5, 利用者には必ず日本語を話してほしい。
- C 6, 芸能やニュースを知っていてほしい。

アンケートを踏まえたオンライン半構造化インタビューでは、日本人職員は、技能実習生に対し、「日常会話を含めた会話力やコミュニケーション」(A3・B3・C1 (2名)・C2・C3 (2名)・C4) から「日本語の文法」に関すること (A1・B1・B2), 「専門用語や記録」に関すること (A2・A4・B6・B7), 「マナーや姿勢や考え方」など (A5・B2・B5・C5・C6), 全体的に現在の日本語力よりも高い日本語能力を期待していることがわかった。

施設 A・B・C とともに技能実習生は来日前に 1 年間程度初級の日本語や介護の日本語を学び、来日後の訪日後講習として 1 ヶ月間日本語を学んでから配属されていることは共通している。その入職前の日本語教育に関する内容までは把握ができていないが、N3 で来日している技能実習生については、初級レベルは終了していると思われるが、それ以上の日本語力が期待されている。

4. 3 業務会話録音とフォローアップインタビュー

インタビュー終了後、介護福祉施設において勤務しながらの参与観察を試みたが、新型コロナウイルス感染症危機管理に対応する観点から、IC レコーダーによる自然会話録音に切り替えた。介護福祉施設に録音を依頼し、承諾を得た施設 B と施設 C から協力を得ることができた。技能実習生 1 人に IC レコーダーを丸一日胸ポケットに入れるなどして、施設利用者との会話や日本人職員との会話を録音し、個人情報かわからないように名前を空欄にするなどの配慮をした上で、文字化²を行った。尚、録音協力者には「個人が特定されない」「技能実習生が介護現場でどのような会話をしているか知りたい」と説明し、承諾を得ている。

フォローアップインタビューについては、技能実習生と施設利用者の録音を技能実習生本人とその指導員となっている日本人職員に聞いてもらい、インタビューを実施し、会話をしてもらった。

4. 3. 1 技能実習生と施設利用者の会話場面

この節では、技能実習生と施設利用者の会話から、技能実習生が「言語行動の問題」及び「コミュニケーション行動の問題」が生じた際に、どのような留意や評価、調整や実施が行われたか、または行われなかったかについて、定義を参考に技能実習生本人や日本人職員のフォローアップインタビューとその後会話で明らかになった問題点を考察する。尚、接触場面として有益なデータであっても、事前インタビューや録音データの様子から、技能実習生と日本人職員の関係性に特に問題がない場合のみフォローアップインタビューと会話を実施し、技能実習生には、指導者とともに録音を聞く同意を得ている。また、接触場面は会話の参加者本人に問題点を挙げてもらうべきであるが、本研究では、指導的立場である日本人職員の規範を事後の第三者評価として、会話の振り返りから技能実習生の規範を自己評価として考察することとする。

【技能実習生と施設利用者の会話1】

番号	話者	自己評価	事後第三者評価 (日本人職員)
1	実習生 何か飲む？	敬語 (事後)	敬語
2	利用者 コーヒー。		
3	実習生 コーヒーか。わかった。	敬語 (事後)	敬語
4	利用者 ありがとう。		
5	実習生 そのズボン、いいなあ。	留意なし	文法
6	利用者 いいなあ。		
7	実習生 トイレ行くよ。一緒に行こか。	敬語・文型 (事後)	敬語
8	利用者 はい。		

FF1 敬語が難しい。勉強したのに話すときわからないです。書くとき、書けます。聞くときもわかります。「行きましょう」の方がいいです。

FJ1 指導はしてるんですけど、敬語はやっぱり難しいですよ。日本人でも難しいですからね。でも、利用者には敬語は使ってほしいです。文章の言い方も気になります。

会話時には気づかないことでも、録音を聞いてみて事後に逸脱に気づく例が見られたが、留意に至らない表現も見られた。また、敬語について、学んでいても現場で話すことができない状況があることがわかった。日本人職員も、敬語が難しいので仕方がないとしつつも、「敬語を使い、正しい文を話す」ことを期待していることがわかった。

【技能実習生と施設利用者の会話2】

番号	話者	自己評価	事後第三者評価 (日本人職員)
9	実習生 すいませーん、「名前」さん、疲れただね。	留意なし	文法
10	利用者 何？		
11	実習生 じゃあ、お部屋行こうか。休むよ。	敬語・文型 (事後)	敬語
12	利用者 休む？		
13	実習生 うん。足上げて、足にのせてね。お部屋まで連れてきますよね。	留意なし 留意なし	助詞 文法
14	利用者 ……。		
15	実習生 ……。	留意あり	声かけなし

FF2 敬語が難しい。勉強したのに話すときわからないです。書くとき、書けます。聞くときもわかります。「行きましょう」「休みましょう」ですね。

FJ2 やっぱり「疲れただね」って言ってしまってますね。利用者に寄り添う言葉がけは上手ですけど、文法がちょっと違うよね。「疲れたね。」って。あと敬語は使えるように。でも、難しいですよ。足に何乗せるの? 「足台に足を乗せてください」って言わないから、黙っちゃったんじゃないか、「連れて来ます」がまずかったか。その後何か声かけしないと・・・。

FF3 うん。自分が間違っただけを言ってると思った。でも、わからなかった。今、わかってよかった。正しい日本語話したいです。

番号 15 において、逸脱に留意したものの、調整ができなかった例では、日本人職員から「声かけをする」という具体的なストラテジーの提示があった。また、日本人職員の規範から、助詞や文法に関する指摘もあったが、技能実習生もその提示に応答する場面が見られた。技能実習生の指導員は、介護の技術やコミュニケーションを指導する立場にある。今回の調査で録音を聞いて具体的に指導ができることを、今後実施したいということだった。技能実習生も、文法上「正しい日本語」を話す規範を持っていることが窺えた。

【技能実習生と施設利用者の会話 3】

番号	話者	自己評価	事後第三者評価 (日本人職員)
16	実習生 孫がもらっただねー。	留意なし	文法
17	利用者 何?		
18	実習生 これ、孫、あ、孫さんがもらっただでしょ?	留意後調整	留意あり
19	利用者 ううん、違うよ。		
20	実習生 違くないよ。孫さん、持ってきたよ。	留意なし	傾聴すべき
21	利用者 孫がくれた・・・。		
22	実習生 ...。	留意	

FF4 私の話、間違えました。利用者様が話を止めました。

FJ3 お孫さんにももらったんだよね。助詞間違えたね。難しいですよ。でも、孫を「お孫さん」ってちゃんと言ってる。

FF5 よかった。

FJ4 でも、利用者様が「違う」と言ったら、寄り添わないと・・・。

FF6 あ、そうか。

この会話では、接触場面で「言語行動の問題」が生じた際に、調整行動がとられるという実態が見られた (番号 18)。その調整行動に関し、日本人職員が肯定的な評価をしている。利用者には敬語を使った方が良いという規範は共通している。また、否定的な評価と

して助詞の誤用による誤解が起こったことが挙げられ、その場合には傾聴すべきというコミュニケーション上の具体的な方法があるという指導があった。

4. 3. 2 技能実習生と日本人職員の会話場面

この節では、接触場面において、技能実習生と日本人職員が「言語行動の問題」及び「コミュニケーション行動の問題」が生じた際に、どのような会話の調整行動をとるのかについて、会話をを行った本人たちが問題として挙げた個所を取り上げ、考察する。

【技能実習生と日本人職員の会話1】

番号	話者		自己評価	他者評価
21	実習生	看護師さんから、肌がひどい人は温度下がった方がいいです。	留意なし	文法
22	職員	何？		調整へ
23	実習生	肌は・・・	調整へ	
24	職員	うん。		
25	実習生	ひどい人は、	調整へ	
26	職員	うん。		
27	実習生	温度下がった方がいいです。	留意なし	文法
28	職員	え？何したほうがいい？		調整へ
29	実習生	温度。	調整へ	
30	職員	温度？温度何？		調整へ
31	実習生	下げた方がいい。	実施	
32	職員	ああ、下げた方がいいよね。		
33	実習生	高いはひどくなる。	留意なし	
34	職員	うん。		調整なし

FF7 多分、文法間違えた。文も長い。何が正しい、わからなくなった。短く言えばわかると思った。

FJ5 「温度下がった」が、気温が下がったと思って、わからなかった。皮膚疾患があるから、シャワーの温度を下げた方がいいとナースから指示があったんだよね。わからなかった。最後の「高いはひどくなる」も、意味はわかるけど、違和感ちょっとあるかなあ。

FF8 正しいは何ですか。

FJ6 「高いとひどくなる」じゃない？

FF9 ああ、わかりました。よかった。

番号22で、聞き返しがあったことにより、逸脱に留意はしたものの、評価ができず、

短く話すストラテジーを使用した例である。その後、番号 31 で実施ができています。また、番号 33 での誤用に関しては日本人職員の規範の逸脱があり、マイナスの評価があった。また、事後に技能実習生が留意しなかった点を日本人職員が自分の規範から逸脱を指摘し、訂正を提示する場面も見られた。

【技能実習生と日本人職員の会話 2】

番号	話者	自己評価	他者評価
35	実習生 これ、しますね。	留意なし	留意あり
36	職員 この前ラップしないでお盆にのせてたんだよね。		
37	実習生 そうですよ。	留意なし	留意あり
38	職員 駄目だよ。なんでラップしないの。		
39	実習生 ははは〈笑い〉	留意あり	留意あり
40	職員 うーん・・・。		

FF 10 わからなかった。このとき、お皿にする、名前、わからなかった。

EJ 7 ラップだよ。このとき、さりげなく教えてたけどなあ。「ごめんなさい」も欲しいなあ。

FF 11 そうですよね。私の国は、恥ずかしいとき笑いますから。

EJ 8 そうなんだ。知らなかった。でも、ラップ、覚えてなかったんだね。

FF 12 今、覚えました。

番号 35 では、技能実習生が「ラップ」がわからず、「これ」と表現していることに対して、日本人職員の留意があり、番号 36 でラップについてのエピソードを話したところ、「そうですよ。」という返答しかなく、番号 38 で仕事上の注意をしている。それに対し、番号 39 で笑っているため、会話が終了している。この場面では、日本人職員のコミュニケーションに関する「間違えたら謝るべき」という文化的な規範があること、また、技能実習生には、「間違えたときに笑う」という文化的な規範もあることがわかった。事後に録音した音声を聞くことで気付いたりお互いを知ることができたと日本人職員から感謝の言葉をいただいた。

4. 4 倫理的配慮

本研究の調査はいずれも、調査協力者に対し、倫理的配慮を行っており、施設名や個人名が特定されないことを説明し、同意を得ている。

5. 考察

事前アンケートやインタビューからわかった日本人職員が今のレベルよりも高いレベルの日本語力を技能実習生に求めていることを踏まえ、自然会話の録音について、接触場面研究の言語管理理論を参考に介護福祉施設での会話を分析した。

自然会話を分析した理由は、先行研究でも指摘されている就労現場で行われているインタラクションに視点を持つ重要性や日本人、外国人両サイドについて考える必要性からである。自然会話からは以下のことが明らかになった。

1) 言語行動について

日本語について正しい助詞・文法を使うという共通の規範はあるが、日本人職員からは否定的な評価が、技能実習生からは留意に至らない状況や逸脱に気付いても行動に移せない状況が見られた。そこには母語干渉や中間言語、規範の厳格さが理由として考えられる。

2) コミュニケーション行動について

敬語など、表面化している行動について、肯定的な評価が見られた。そこには、お互いに敬語に関する共通規範が存在する。また、「間違えたら謝るべき」という文化的な規範と「間違えたときに笑う」という文化的な規範もあることがわかったが、規範のずれを修正するには、お互いの文化背景を具体的に知る必要があるだろう。

3) 実際のインタラクションを身体的に知る必要性

日本人間の高齢者介護福祉施設での談話を日本語教育に使う重要性を指摘した先行研究も真正性があり必要だと思われるが、現場は日本人間もさることながら日本人と外国人のインタラクションも重要である。今、どのような状況なのかをお互いが知り、内在化している言語問題について共同で模索し、より良い方向性を探る一つの方法として、録音した音声を双方で聞くという方法も事後に気付いたりお互いを知る等有効であることがわかった。

また、学んだことが話せない状況については、その原因を今後探る必要があるが、接触場面において取り除ける問題については、まず、「日本語の表現を学んでも現場で話すことができない」等外国人介護人材の言語状況を具体的に知ることが必要になることがわかった。

6. まとめ

本研究は、介護福祉施設で技能実習生と日本人職員がどのようなコミュニケーションを取り、どのような言語問題があるのかをアンケートとインタビュー、自然会話の分析から考察した。日本語母語規範については、大平（2001）が接触場面で生起する問題が全て非

母語話者に原因があるという無意識的な前提を持ってしまう危険性を指摘しているが、今回の調査では考察 1) にあるようにその危険性に当てはまることが多くあった。本研究の調査対象となった介護福祉施設に勤務している日本人職員に非があるということは決していないが、外国人労働者を受け入れている多くの日本人は、無意識的な言語やコミュニケーションに関する規範からやはり無意識的に外国人職員の評価をしているのではないだろうか。技能実習生については、その評価を基に指導が行われている可能性もある。特に介護に携わる職員は相手への尊厳や相手を受け入れるコミュニケーションやノーマライゼーションを学び³現場で実践をしている。そこで、例えば日本語を学んでも話すことは難しい等、外国人の立場になり、介護の理念を外国人受け入れに応用することを 1 つ目の提案としたい。

また、2 つ目の提案として「技能実習生にどのように日本語を教えたらいいかわからない。」と今回の調査時に相談をされたことから録音データを技能実習生と共に聞き、やり取りを行う方法を取ったが、それが今後の日本語教育の方法の参考となったことを挙げたい。日本語教育の専門家以外が日本語を指導しなければならない状況が、技能実習生の場合が多く考えられるが、特に有用であろう。

加えて、永井 (2018) は外国人看護師、介護福祉士が習得しなければならない医療・福祉の談話は、現場で日本人スタッフが無意識に使っている談話ストラテジーが必要だとしているが、そこに外国人側の無意識に使う談話ストラテジーを日本人スタッフが理解することも必要である。そこには、時間の経過とともに見られる規範の変容も知る必要がある。

本研究は特別養護老人ホームに限った調査であったが、今後も有料老人ホームなどより高いコミュニケーション能力が求められる施設においても調査を続けたい。それから、今回扱えなかった非言語コミュニケーションについて調査し、可能であれば一般化を目指したい。また、岡崎 (1994) の提唱する共生日本語の概念の一部である日本語の言語内共生 (異言語の話者同士が同一コミュニティの住民として共生していくために、ある言語について共生に適した運用を作り出し、共生言語として形成していく過程) にある相互調整行動の創出 (意味・理解・話題) に関わる相互調整行動を理論として、お互いに対等な立場で、共に生きていく具体的な策を探りたい。

〈注〉

- 1 外国人技能実習機構によると、令和 2 年度の合計は 12,068 人 (2021 年 12 月 30 日検索)
- 2 文字化の作業については、宇佐美 (2020) を参考にした。
- 3 筆者は介護の資格を有している。

参考文献

- 宇佐美まゆみ編 (2020)『日本語の自然会話分析 BTSJ コーパスから見たコミュニケーションの解明』くろしお出版.
- 上野美香(2013)「介護施設におけるインドネシア人候補者の日本語をめぐる諸問題—日本人介護職員の視点からの分析と課題提起—」『日本語教育』156号, pp.1-15.
- 遠藤織枝 (2012)「介護現場のことばのわかりにくさ —外国人会介護従事者にとってのことばの問題—」『介護福祉学』19 (1), pp.94-100.
- 大関由貴・奥村匡子・神吉宇一(2014)「外国人介護人材に関する日本語教育研究の現状と課題—経済連携協定による来日者を対象とした研究を中心に—」『国際経営フォーラム』25, pp.239-279.
- 岡崎敏雄 (1994)「コミュニティにおける言語的共生化の一環としての日本語の国際化」『日本語学』13 (12), pp.60-73.
- 小川美香 (2018)「介護現場におけるコミュニケーションとは EPA によるインドネシア人候補者受け入れ施設からの知見」『リテラシーズ』22, pp.221-17.
- 小川美香 (2020)「外国人介護人材の「コミュニケーション力」再考—就労現場における共有知識・情報・期待を前提に—」『日本語教育』176, pp.64-78.
- 尾崎明人, ネウストプニー, J. V. (1986)「インターアクションのための日本語教育 J, Jr 日本語教育」59号, pp.117-134.
- 高民定 (2016)『接触場面の言語学—母語話者・非母語話者から多言語話者へ』ココ出版 pp.19-36.
- 公益社団法人日本介護福祉士会 (2014)「外国人労働者の受け入れと、介護の技能と技術、日本語能力・コミュニケーションの重要性」法務省第8回第6次出入国管理政策懇談会資料1 <<https://www.moj.go.jp/isa/content/930003011.pdf>> (2021年12月1日最終アクセス)
- 厚生労働省「外国人介護職員の雇用に関する介護事業者向けガイドブック」 <<https://www.mhlw.go.jp/content/12000000/000496822.pdf>> (2021年12月1日最終アクセス)
- 三枝令子 (2012)「介護福祉士国家試験の日本語—外国人介護従事者にとってのことばの問題—」『介護福祉学』19(1), pp.26-33.
- 高本香織 (2011)「異文化間看護・介護とコミュニケーション—EPAに基づく外国人看護師・介護福祉士候補者の受け入れをめぐる—」『麗澤学際ジャーナル』19(1), pp.33-43.
- 武内博子 (2018)「外国人介護福祉士が捉えたいまうまくなかったコミュニケーションの要因」『日本語研究』38, pp.59-74.
- 立川和美 (2011)「EPAをめぐる国内での日本語教育の現状—インドネシア人看護師・介護福祉士候補者への教育と国家試験に向けた方策—」『流通経済大学社会学部論叢』22(1), pp.101-111.
- 立川和美 (2013)「高齢者介護施設の談話に見るコミュニケーションパターン—外国人介護士に対する日本語教育の応用に向けて—」『流通経済大学社会学部論叢』24(1), pp.95-112.
- 東京都福祉保健局 (2011)『社会福祉施設における人材育成マネジメントガイドライン』(<<http://www.metro.tokyo.jp/INET/OSHIRASE/2011/03/DATA/20134401.pdf>>)
- 登里民子・石井容子・今井寿枝・栗原幸則 (2010)「インドネシア人介護福祉士候補者を対象とする日本語研修のコースデザイン—医療・看護・介護分野の専門日本語教育と、関西国際センター

- の教育理念との関係において」『国際交流基金日本語教育紀要』6, pp.41-56.
- 登里民子・山本晃彦・鈴木恵理・森美紀・齊藤智子・松島幸男・青沼国夫・飯澤展明 (2014) 「経済連携協定 (EPA) に基づくインドネシア人・フィリピン人看護師・介護福祉士補者を対象とする日本語予備教育事業の成果と展望」『国際交流基金日本語教育紀要』10, pp.55-69.
- 中川健司 (2012) 「新カリキュラム介護福祉士国家試験受験に向けた漢字学習の効率化に関する一考察」『専門日本語教育研究』14, pp.41-46.
- 中島 綾子 (2020) 外国人介護福祉士の日本語コミュニケーションの実情と課題 —就労 1 年目の EPA インドネシア人介護福祉士候補者を事例に— 『東洋大学大学院紀要』56, pp.1-16.
- 永井涼子 (2018) 「外国人看護師・介護福祉士教育に向けた談話分析」『地域ケアリング』Vol.20 No. 2, pp.60-63.
- ネウズプニー J. V. (1981) 「外国人場面の研究と日本語教育」『日本語教育』45号, 30-40.
- ネウズプニー J. V. (1982) 『外国人とのコミュニケーション』岩波新書
- Neustupný, J. V. (1985 a) "Problems in Australian-Japanese contact situations". In Pride, J. B. (ed.), *Cross-cultural encounters: communication and miscommunication*, pp.44-84. Melbourne: River Seine.
- Neustupný, J. V. (1985 b) "Language norms in Australian-Japanese contact situations". In Ciyne, G. M. (ed.), *Australia, meeting place of languages*, pp.161-170. Canberra: Pacific Linguistics.
- ネウズプニー J. V. (1991) 「新しい日本語教育のために」『世界の日本語教育. 日本語教育論集』1, pp.1-14
- ネウズプニー J. V. (1995) 『新しい日本語教育のために』大修館書店
- 野村愛 (2014) 「就労開始 2 年目の EPA 介護福祉士候補者を対象とした学習支援の事例」『専門日本語教育研究』16, pp.79-84.
- 宮崎里司 (2002) 「第二言語習得研究における意味交渉の課題」『早稲田大学日本語教育研究』創刊号 pp.71-89.

本稿は 2020 年度科学研究費助成金 (挑戦的研究 (萌芽) 20 K 20696 研究代表者 神山英子) 「介護現場における異文化コミュニケーションを円滑に進めるための事例集の開発研究」の助成を受けた一部である。また、アンケート・インタビュー、会話データ採集にご協力いただいた施設の方々に深く感謝申し上げます。

Public Performance and Spiritual Uplift: Seki *Matsuri* and “the Flow”

Brian James Mahoney

公的儀礼行為と精神的昇華：関宿の祭りと「フロー」

ブライアン ジェームズ マホニー

〈摘要〉

ファン・ヘネップは、儀礼的行為には「分離期」「移行期／過渡期」「統合期」の三つの段階があると主張したが、その後ターナーは、儀礼的行為を公的な活動（カーニバル、祭り等）として解釈し、ヘネップの三つの段階を「フレーム」「フロー」「リフレクション」と修正した。本稿では、ターナーの議論を援用し、三重県関町で毎年夏に開催される壮麗な公的活動、関宿祇園夏祭に焦点を当てる。筆者は長年に渡って関木崎祭囃子の構成員であるが、本稿では祭りの体験と儀礼的行為として論じるとともに、筆者及び同じく祭りに参加した人々の経験を報告する。祭りの目的は地域神、守り神を奉るものであるが、それはつまりターナーの言うところの「フロー」であり、人々を祭りの“魂”に導くものである。

キーワード：関宿祇園夏祭、東海道五十三次の関宿、祭囃子、儀式、三重県指定文化財

1. Introduction

Termed the “Rites of Passage”, folklorist Arnold van Gennep (1873-1957) introduced three stages of ritual practice, of which he categorized as the pre-liminal, liminal and post-liminal. The liminal or “threshold” may be best understood as a time and space where departure, transition and return take place. Advancing upon van Gennep’s original work, cultural anthropologist Victor Turner, in a paper published in 1979, introduced a concept he called “public reflexivity” where the liminal stages of ritual as a part of public performance, a carnival or festival, for example, are redefined as *frame*, *flow* and *reflection*. To examine what Turner means by frame, flow and reflection, I will focus on the town of Seki in Mie prefecture, a small community of roughly 7,000 located in central Japan where I have lived for the past twenty years. As a longtime member of Seki’s shrine festival musical group (Seki’s *Kozaki matsuri bayashi*), I look to reflect on my personal experiences, and those of others with whom I share this special time of ritual performance in the public sphere.

To begin with, I will discuss the concept of “frame” as I introduce the town of Seki and its major public performance the shrine festival or *matsuri*. Next, as the central aspect of the *matsuri* revolves around the local deity or “kami”, I will discuss the connection between folk religion, or folk Shinto, and that of Seki’s *matsuri* and its worship of the *kami*, in effect what truly the festival is about. It is within this frame of worship and celebration that everyday life is suspended, and “communitas”, or the true spirit of the community arises. In this transitional or “liminal” state, the participant may experience a certain power or oneness-being in the “flow”- with the subject of veneration and upon return, or what Turner denotes as “reflection”, thus feel transformed. I argue that it is this aspect of spiritual uplifting, that largely compels participants to renew the act of ritual as public performance year after year, generation after generation, for time eternal.

2. Frame: Seki *matsuri* through space and time

In preparation for this paper, I conducted interviews with Tanigawa Kazuhiro (aged 66) and Kasai Satoshi (aged 43) who are both residents of Seki and have long played key roles in Seki’s *matsuri*. Over two separate interview sessions (Tanigawa/Kasai, personal communication, Nov. 14th & 28th, 2021), we discussed a range of topics about Seki, its history, and most importantly, its annual shrine festival.

First documented as a strategic meeting point during the Jinshin War in the year 672 CE (鈴鹿関町文上巻, pgs. 31-34), Suzuka no Seki (鈴鹿関), as it was known in ancient times, was for nearly one hundred fifty years the largest of the San-Gen (古代三関), or three great barriers stations of the central Kinai domain (See Mahoney: *Imagining Suzuka no Seki*). By the beginning of the 17th century, the Tokugawa *bakufu* had redeveloped Seki into one of the major post towns along the Tōkaidō thoroughfare connecting the capital of Kyoto with Edo (Tokyo). However, the town, located at the base of a mountain range with several large rivers, the *Kabuto*, *Suzuka* and *Ono*, has long owed its sustenance to that of abundant agriculture and forestry resources. According to Tanigawa and Kasai (2021), the local *kami* (deity/sometimes pluralized as deities) is viewed as the progenitor of rice, wheat and agricultural food stuffs and praised since ancient times for the continuing generosity it bestows upon the community. It is commonly believed that the *kami* resides in the fields from spring until the end of autumn, leaving for the mountains in winter time. It is for the summertime shrine festival that the *kami* is ritually summoned to its “earthly” home inside

of Seki’s central shrine. Miyake (pg. 25) writes that for the Japanese people religious beliefs can be described as an amalgamation of its more primitive beginnings with that of elements from Shinto, Buddhism, Daoism, yin-yang dualism, Confucianism, and therefore the term “folk religion” (*minzoku shūkyō*) more accurately applies. This folk religion, with its festivals, annual observances, rites of passage, and even exorcism, thus “puts the greatest emphasis not on ideas but on rituals.”



Figure 1. 関宿中町 Tradition has it that during the time of winter in Seki-Juku, the local *kami* leaves for the nearby mountains. Photo by Author.

According to Turner (pg. 468), “Ritual time is ordered by rules of procedure, written or unwritten...with a well-defined beginning, middle, and end”. In Seki, as a prelude for the coming of the *kami*, rites of purification are meant to drive away evil and to welcome the *kami* home. The morning before public performances carefully orchestrated private rituals are conducted by the Shinto priest(s) and attendants (Tanigawa, 2021). The very first “act” of the *matsuri* is to ritually invoke the *kami* from its inner sanctuary with elaborate offerings,

including but not limited to that of rice, salt, water, rice wine and a cut of fresh *sakaki* branches (Ono, pgs. 65,66). Schnell (pg. 17) writes that the *kami*'s spirit is then "bound" to a talisman, whereas Ono (pg. 68) writes that the *kami* itself is symbolically transferred from the inner sanctuary to the sacred palanquin (*mikoshi*). In whichever case, the palanquin serves as the temporary abode of the *kami*/spirit as it is paraded through town (Tanigawa, 2021).

Turner (pg. 467) writes that, "All performances require framed spaces set off from the routine world". Turner describes this space(s) as either permanent, the shrine building itself, for example, or in the case of the public performance, a space that is situational. The spaces that are delineated for the Seki *matsuri* includes those which are fixed, the two shrines and storehouses where the palanquin and 2-3 story wooden wagons (festival floats) are kept, and those that are situational, the routes that the procession follows being decided yearly by neighborhood leaders. What is central to the concept of public reflexivity though is that these spaces are in public view. They are not, as Turner writes, "secret affairs" where rites are performed in "caves or groves or in lodges protected from profanation by poisoned arrows." However, there are at least two major aspects of the *matsuri* that really are in a sense "secret affairs", the ritual invocations, for one, and the *otabisho* or resting place another. The *otabisho* is a somewhat secret location where the *kami* rests for the night in-between visiting the shrines during festival time (Ono, 69). In Seki, this resting place is located on the grounds of the town's original shrine, *fue fuki daimyo-ji* (笛吹大明神).

The Seki *matsuri* involves two types or structures within the framing process, on the one hand, a carefully controlled environment with fixed time and space that include "firm procedural, even rubrical rules" and contrasting with this, situational time and space for which Turner says gives rise to, "numinous", or more plainly speaking, "a time of wonders" (pg. 470). In this so-called higher reality, a parallel world emerges where several key things may occur, including a temporary suspension of the mundane life, role and status reversals, a refocusing or reengagement with the past, "chaos" to an acceptable limit, and so forth. To mark these polarities in social structure and behavior, Turner introduced the terms *communitas* and "anti-structure", he describes it as, "the mutual confrontation of human beings stripped of status role characteristics - people, "just as they are," getting through to each other..." (pg. 471).

3. Performance: “*Communitas*” and the *matsuri*

It is an especially powerful moment, and something that seems right at home with Turner’s concept of *communitas* or *anti-structure*, when a group of unmarried men in their late teens and early twenties, clad in all white from sacred footwear to sacred headband, hoist the palanquin (神輿) upon their able-bodied shoulders. The final destination is already known, however, as their own spirits become one with the *kami*, they will travel as freely as the *kami* takes them. According to Tanigawa/Kasai (2021), after the conclusion of the “deity transfer ceremony” (*kamiutsushi*) the palanquin procession begins in the late morning of the first day, and is marked by the loud voices, rhythmically chanting “*wasshoi, wasshoi*”- a special call to the community that the *kami* is now in their presence. Turner (pg. 468) mentions that often these audible markers are used in ritual, the shouting and chanting, for example, to dramatically signal that secular time has now been suspended and the time for the sacred has taken center stage. And so, these ten to fifteen young men, who have seemingly taken over the streets of the community, carry the palanquin throughout the day, stopping at random to bless various homes and businesses, chanting and gesticulating with bountiful energy. It is an especially dramatic example of the role and status reversals taking place, with full control and responsibility of the *kami*, for which the spirit of the community seems to truly rest upon their shoulders.

By late afternoon, the neighborhoods grow ever so quiet, as early evening brings the main event- the *dashi-gyōretsu* or giant wooden wagon (float) procession (山車行列). Crowds gather, and various large groups of participants soon appear clothed in their own unique colorful *matsuri* costumes, chanting and merry-making as they pull the enormous wooden wagons, known as *dashi* (山車), full of musicians playing bamboo flutes, drums and gongs. It is most evident at this time of *matsuri*, where the everyday routine of life is suspended and what Turner (pg. 265) so aptly describes as “a state or process which is betwixt-and-between the normal” arises to supplant it- if only for a short time. In contrast to the shrine ceremonies, the *dashi* procession introduces a whole new array of personalities, positions and responsibilities amongst the wide-variety of participants. As Schnell (pg. 20) comments, “The liminal phase (where according to Turner social relationships are upended, reversed, or even abandoned all together) is significant in terms of social process, as it represents an opportunity for introducing new ideas”. This can be seen most clearly in the new hierarchy of positions that is represented by each of the four neighborhood 2-3 story wooden *dashi*. At

ground level centered around the *dashi* itself, are the “muscle”, a mixture of younger and not-so-young men who while chanting traditional work songs, carefully maneuver and direct the several ton- four-wheeled wagon. With heavy ropes in hand, the “pullers” make up the largest share of participants, men, women and children whose job is to literally pull the *dashi*, not easy work either considering the wooden wagon wheels alone measure a meter and half tall. At the second level, or on the first tier, are the musicians whose positions are based upon instrument, age, gender and experience. The single large suspended-drum (*tsuri-daiko* 釣太鼓), providing the main rhythmic pulse, is hidden inside as well as that of the young boys who play it. At the front, in full public view is the group of five young girls, while singing and chanting in unison, play the smaller tension drums (*shime-daiko* 締太鼓), and the small gong (*kane* 鉦). Positioned around the first tier of the cart are the bamboo flute (*shinobue* 篠笛) players, both men and women, and finally the master flute player (the musical leader) who is positioned in the front just behind the young girls. Rounding out the group, and standing alone upon the wagon’s central beam facing the musicians is the “guide”, Kozaki’s spiritual driver (see figure 2).



Figure 2. 木崎の山車 The *muscle*, *pullers*, musicians, the “guide” and at the top- the leaders propel Kozaki’s *dashi*. Photo by Syuzo Kariya.

At the next and final level, are the neighborhood leaders who, at least during the *matsuri*, ‘sit atop the mountain’ above everyone else (enjoying the best view). It is interesting to note that our neighborhood’s three *matsuri* leaders (who are basically volunteers), are employed as a plumber, delivery truck driver and museum staff, respectively (Tanigawa/Kasai, 2021). Turner (pg. 467) makes specific note about this when he writes, “in many cultures rituals performed at major calendrical turns portrayed turnabouts of normal social status”, however, Turner finds that this is only one part of the story, he continues, “Just as important are the ways society finds in these public rituals of commenting on and critiquing itself”. Certainly, once the sacred returns to the mundane, I cannot help but have a sense of respect for our *matsuri* leaders, regardless of their occupation or social position. Therefore, it is not only a way of a community critiquing itself, but also that of individuals reassessing pre-conceived notions of hierarchy and social status, and the extent of power and/or authority.

4. “Into the Flow” of the *matsuri*

Especially in smaller more tight-knit communities such as Seki, the public acts of ritual have long been practiced not only for praise and protection but as an expression of the unique flavor or individuality of the peoples themselves. In times past, from the Edo era (beg. 1603)



Figure 3. Kozaki’s legend of the “Kappa” or *water spirit* silk embroidered tapestry.
Photo by Syuzo Kariya.

until the early period of the Meiji era (beg. 1868), the Seki *matsuri* had two uniquely separate festivals happening simultaneously, one in the Shinjo neighborhood centered around the shrine *Fue fuki daimyo-ji* and the other in the Naka-machi / Kozaki neighborhoods



Figure 4. 三番町 (San-Ban Chō)

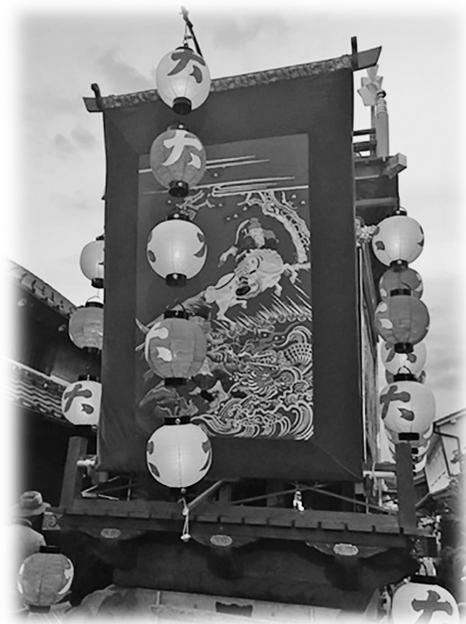


Figure 5. 北裏 (Kita-Ura)



Figure 6. 四番町 (Yon-Ban-Chō)

Photos 4, 5, 6 by Author.

originating from what is now called Seki shrine, or *Seki-jinja*. During its golden age from the middle years of the Edo era (early 19th century) through the time of the Meiji era, the Seki *matsuri* featured a total of sixteen, 2-3 story wooden *dashi*, six of them in the Shinjo neighborhood, eight in Naka-machi, and two in Kozaki (鈴鹿関町文上巻, pgs. 622-625). While today, only four *dashi* remain, three in Naka-machi and one in Kozaki, each neighborhood’s wooden wagon is highly unique, quite different in architectural design and decoration, including the exquisite silk tapestries, and lanterns which adorn them (see figures 3, 4, 5 & 6).

Together with the giant wooden *dashi* and classic Edo era townscape, adding significantly to the overall atmosphere of the festival are the neighborhood’s uniquely distinctive symbols, colors and *matsuri* costume. And bringing all these varied elements together as if it were a single whole is the music of Seki *matsuri*. According to Tanigawa and Kasai (2021), in the early 1800 s, an imperial court musician of some renown by the name of *Saito Tarozaïmon*, had fallen ill while on his way to visit the Grand Shrine of Ise taking rest in Seki town. During his long recovery in Seki, he witnessed the *matsuri* and inspired by the kindness shown to him by the people of Seki, composed a song to accompany what was then a music-less procession. Creating the melody and all musical parts by chanted verse, *Tarozaïmon* constructed a multi-layered composition similar in theme and tonality to that of *gagaku*, or imperial court music of ancient Kyoto and Ise Shrine. Tanigawa further posits that *Tarozaïmon* likely would have returned to Seki perhaps with some of his fellow court musicians to teach the locals how to play the music, in effect, a musical workshop where not just those interested may have participated, but rather, the whole town coming together to witness and learn about the various instruments and musical parts. His oral poem to the people of Seki, with the subsequent additions of bamboo flutes, various sized drums, gong and lyrical accompaniment would evolve into a sweeping five-part suite (Takakusu, 1978).

The slow waltz-like cadence of *Tarozaïmon*’s ballad to Seki is the catalyst to “flow” for which Turner (pg. 487) describes as a state in which there is “little distinction between self and environment, between stimulus and response, or between past, present, and future.” While the composition is ten minutes in length, it is performed almost continuously throughout the evening procession, around five hours in total. Jennings (pg. 117) makes an interesting observation about repetition in ritual performance, he writes, “Ritual action does not primarily teach us to see differently but to act differently. It does not provide a point of

view so much as a pattern of doing.” And it is with this pattern of doing that the “participants are free to interpret the movements in ways that are most relevant to their immediate circumstances” (Schnell, pg. 294). And this makes sense when Tanigawa and Kasai (2021) talked about the music initially having been performed only one way, however, each neighborhood over time added their own slight rhythmic variations, time feels, stops and starts, mutated or half-tones, extended chanting and so on, for which this public performance reminds us that a community, is still a collection of persons in search of individual expression (see figure 7).



Figure 7. *Tarozaimon*'s five-part suite with bamboo flutes, drums, gong and lyrical accompaniment.
Photo by Syuzo Kariya.

If there is one special aspect of the Seki *matsuri* that captures the “flow” as Turner describes, it must be the late evening meeting of the four *dashi* in the central square. In this predetermined space and time, the *dashi* with candle-lit red paper lanterns suspended from top to bottom on all sides, appear as glowing-wooden skyscrapers towering over the thousands of onlookers. It has already been four hours, and the “muscle”, the “pullers” and the musicians have been moving, chanting and playing almost non-stop. Now it is time for a little showing off, for the *dashi* can rotate 360 degrees for as long and as fast as the “muscle”

are willing and able to make it happen. Two to three minutes goes by, five minutes more, as the rotations continue, the crowd roars its approval wanting only more of the same. Ten minutes and there’s really no sense of time, all a musician can do is close one’s eyes and play, fingering the notes, or beating the drum, if anything- so as not to become disoriented and fall off. However, the feeling is beyond words. A tremendous pulse of one group in unison with the others, four giant spinning red lanterns glowing for the community and its *kami* (see figure 8).



Figure 8. 舞台回し The *dashi* in full-rotational spin, the red-candle lit lanterns blending into one.
Photo: Kameyama-Kanko.

5. Return and Transformation

How could one not be affected by an experience like this and not be “transformed” if only a little. Tanigawa (2021) remembers so fondly when as a child the main street was a dirt road with the incredible sight of the *dashi* which glowed so bright since there were few lights at night. All he wanted to do, just like all the other kids, was to have the chance to play drums on the giant wooden wagon. He recalled that with too many children waiting in front of him, he never got the chance to ride and perform. However, at the age of forty-one he

fulfilled his childhood dream when after mastering the *matsuri*'s bamboo flute he ascended Kozaki's *dashi* for the very first time. Today he is recognized as one the finest of all Seki *matsuri* flute players, and to our great benefit- passing on his knowledge as master teacher of both flute and drums. Kasai (2021) got his first taste as a *matsuri* musician in the 5th grade, switching to bamboo flute from junior high school, now together with Tanigawa, training new generations of *matsuri* musicians. And so, while the *kami* provides the cause, it is the "flow" as an uplifting experience which draws the people into the "spirit" of the *matsuri*. Set to transform the everyday life of the community, the annual observance of the Seki *matsuri* brings together a community of celebrants, where in a phenomenon described by Campbell (1949), the divine and the human, which normally seem as distinct as night and day, in fact, blend into one. The realm of the sacred is mostly a forgotten dimension of this world we know. The Seki *matsuri* exemplifies the point- that the two kingdoms, are truly one.

Bibliography

- 関町教育委員会 [Seki Town Board of Education]. (1977). 鈴鹿関町文上巻 [History of Suzuka Seki Town, Volume One]. Tokyo, Japan: Nissha Printing Co., Ltd.
- Campbell, J. (1949). *The Hero Has a Thousand Faces*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- Hitoshi, M. (2005). *The Mandala of the Mountain: Shugendō and Folk Religion*. (G. Sekimori, Ed. & Trans.). Keio University Press.
- Jennings, T.W. (1982). On Ritual Knowledge. *The Journal of Religion* 62 (2), 111-127.
<http://www.jstor.org/stable/1203176>
- Kasai, H. & Tanigawa, K. (2021, Nov. 14th, 28th). Personal Communication. Seki town, Mie prefecture, Japan.
- Mahoney, B.J. (2021). Imagining Suzuka no Seki 「遺跡の今昔」. *Department Bulletin of CIER, Mie University* (16), pp. 77-89. <https://ci.nii.ac.jp/ncid/AA12754693>
- Ono, S. (1987). *Shinto: The Kami Way*. Tokyo: Charles E. Tuttle Company.
- Schnell, S. (1999). *The Rousing Drum: Ritual Practice in a Japanese Community*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Takakusu. (1978). *Seki Matsuri Musical Score for Flute and Drums*. Seki town, Mie prefecture, Japan. Unpublished.
- Turner, V. (1979). Frame, Flow and Reflection: Ritual and Drama as Public Liminality. *Japanese Journal of Religious Studies*, 6 (4), 465-499. <http://jstor.org/stable/30233219>

調査報告

留学生と地域の人々との盆踊りを通じた国際交流と地域の国際化 — アンケート調査から —

福 岡 昌 子

International Exchange and Regional Internationalization through Bon Festival Dance Involving International Students and Local People — Conclusions from a Questionnaire Survey —

FUKUOKA Masako

〈Abstract〉

At Mie University, as the number of international students from overseas partner universities is increasing, international students have been trying to have international exchanges with local people through Bon Odori. Unfortunately, the event has been canceled due to the Corona disaster, but it is a summer project of the International Exchange Center, which has been held for nearly 10 years since 2009. Up to now, 50 international students have participated in the Bon Odori party held at the special temple at the knee of Mie University every year.

This paper reports a questionnaire survey to international students and local people in 2018. International students wore yukata and participated in the Bon Odori dance, and enjoyed the cross-cultural experience from the bottom of their hearts by dancing with the local people. On the other hand, it turned out that the local people were delighted and welcomed the fact that Bon Odori, whose number of participants was decreasing year by year, became lively and internationally. Many international students and local people were able to exchange internationally through Bon Odori, and many requested that they continue in the future. While multicultural coexistence and SDGS are being called for, there are a wide variety of ways in which international students can interact with the local community, but we would like to connect them to the future in a way that is beneficial to both parties and the university.

キーワード：留学生、地域、国際交流、盆踊り、アンケート調査、地域の国際化

1. はじめに

三重大学国際交流センター（1997年設立）は、2005年の法人化以降、国際交流・国際教育・国際サービスの3部門に改編された。国際教育部門は、2019年に留学生30万人計画^①が達成された現在まで、協定校や受入れ留学生数が倍増していく中で、日本語・日本文化教育や異文化理解・異文化間コミュニケーション教育を担ってきた。その間、在住外国人を対象としたサバイバル日本語教室はじめ、文化庁「生活者としての外国人」支援助

成によるボランティア日本語講師養成講座、ブラジル人子弟のためのボランティア日本語講座など、多くの事業を実施してきた。

本稿では、留学生と地域の人々との盆踊り交流会を通じた国際交流事業について紹介する。現在は残念ながらコロナ禍により開催が中止されているが⁽²⁾、2009 年より 10 年近く継続実施されてきた国際交流センターの夏の事業である。三重大学のお膝元にある栗真町屋町にある専称寺⁽³⁾で行われる地元の盆踊り交流会に、毎年 50 名前後の留学生が参加してきた。事業の目的としては、次項で述べるように、①日本古来の盆踊りという日本文化を知る、②留学生の異文化体験への挑戦、③浴衣を着てみる、④留学生と地域の人々との国際交流の 4 点である。

留学生の学外での活動は様々である。留学期間中に積極的に学外に出て日本人と積極的に交流を持とうとする者、逆に留学生宿舎と大学との往復だけで留学生生活を終えてしまう者、多種多様である。留学生によっては学内の日本人学生との交流さえも構築することが難しく、学外の人々との交流は全くないまま帰国するという留学生が大半を占める。盆踊りという日本の夏に行われる異文化体験をぜひ留学生に体験してもらいたいということでこの事業が開始された。

2018 年に地元の方にアンケート調査し、地元の方々は留学生の参加をどのように思っているか、一方留学生は参加してどう思ったのか、アンケートを取る機会を得た。本稿では、その結果について報告するとともに、今後の留学生と地域の人々との国際交流の在り方、地域の国際化について考えてみたい。

2. 事業の背景

2.1 日本古来の盆踊りという日本文化を知る

津市は旧盆の風習が残る街である。三重大学が位置する栗真町屋町は津市の中でも大きな盆踊りを毎年開催する地区である。このお盆という先祖祭祀の風習は、アジア地域の国々でも行われており、アジアからの留学生には共感できるものがある。一方、ヨーロッパの留学生にとっては珍しい異文化体験となるが、留学生の中には日本文化の授業で、盆踊りを学んだという留学生もいて、実際に日本の盆踊りを体験できて喜ぶ者も多い。毎年恒例となったこの行事は、留学生にとっては日本古来の日本文化や風習を知るいい機会となっていた。

2.2 留学生の異文化体験への挑戦

盆踊りは、日本の祭りでは珍しく参加型の祭りである。青森のねぶた祭は他地域からの人々を受け入れてくれる代表的な参加型の祭りだと言えるが、そもそも外国人観光客が飛

び入りで参加できる祭りは少ない。日本の祭りの多くは地域の人々が地域の信仰を祀るものが大半で、観光客はそれを見て楽しむという祭りが多いのではないだろうか。その中で、日本の地方に残る盆踊りは参加型の祭りだと言える。栗真町屋町の地域の人々は、そんな留学生を毎年快く受け入れてくれている。

2.3 日本の着物：浴衣を着てみる

国際交流センターには、現在寄付などにより男性の浴衣と帯セットが約10着、女性の浴衣と帯セットが約25着ある。津市は例年7月末には花火大会があるので、女子留学生は密かに浴衣を購入し、浴衣を着て出かける花火大会や盆踊りを楽しみにしているようだ。男子留学生は当初は浴衣を着ることに抵抗があったようだが、近年は浴衣を着てみたいという男子留学生も増えている。留学生に着物を着せる役は毎年教員であるが、地元のボランティアの方々が着付けの先生になって留学生に着方を教えてくれる時もあった。留学生たちは、貸し出し用の浴衣から好きな柄の浴衣を選び、夏の暑い中汗だくになって浴衣に着替え、日が沈む頃に国際交流センターのある建物の玄関に集合する。下駄を用意する者もいて、履きなれない下駄をはいて盆踊り会場となる専称寺に向かう。

2.4 留学生と地域の人々との国際交流

毎年10月末に大学祭があり、地元の方々が楽しみにして本学を訪れる。海が近い栗真地区には高い建物は少なく、地震が起きた際は三重大学の高い校舎が避難場所だと語る人々も多い。また、この地区には賃貸アパートも数多くあり三重大学の学生が居住している。竜神祭や除夜の鐘撞など地元の行事に関心のある学生は個々に参加していたようだ。ある日アパートに住む留学生が盆踊りのチラシが郵便受けに入っていて、これはどんなお祭りなのか聞かれたことから、夏に盆踊りをやっていることを知り、留学生を連れて行こうということになったと記憶している。留学生が盆踊りに参加する度に、自治会の方々は留学生のために飲料のチケットや団扇を準備してくださっていた。

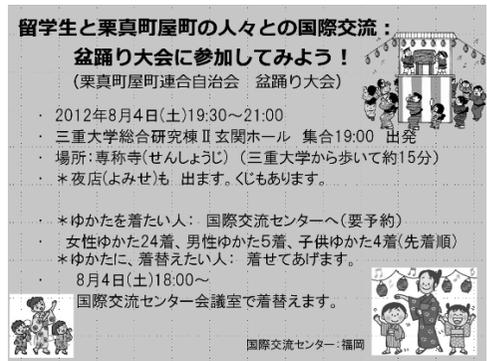


図1. 留学生へ盆踊り参加への案内（2012年）



図2. 留学生に着付けをする教員達（2013年）

3. 地域の方々・留学生へのアンケート調査から見えるもの

3.1 地域の方々のアンケート結果から

10 年近く留学生が栗真町屋町の盆踊りに参加させていただいてきたが、地元の方はどのような感想をお持ちなのか 2018 年アンケート調査を実施した。本項では 68 名のアンケート結果をまとめた。

① アンケートに回答して下さった方の年齢

盆踊りの会場でアンケートにご協力いただいたのは 50 代から 80 代の方々だった。盆踊りは櫓（やぐら）を立て、かき氷などの屋台も出しており、大変な準備の要る作業であると思われる。盆踊りの練習も、事前に婦人会を中心に行われている。

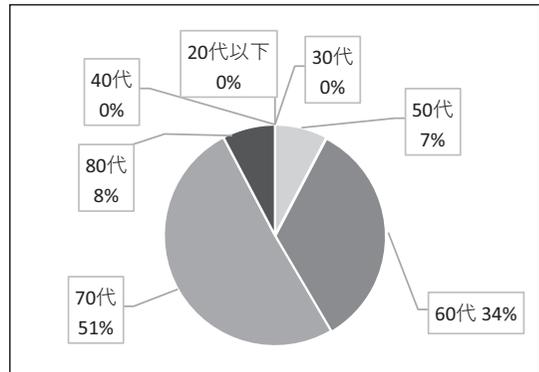


図 3. アンケートに回答された方の年代

② 留学生が盆踊りに参加しているのをご存知ですか。

回答者は、留学生が毎年盆踊りに参加していることをご存知だった (89%)。近年では、自治会の方が開催チラシを国際交流センターまで持参してくださるようになっていた。

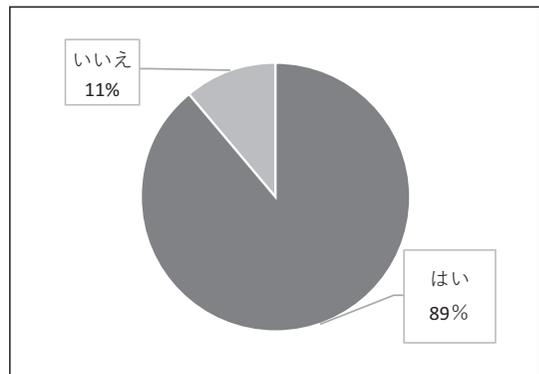


図 4. 留学生が盆踊りに参加しているのをご存知ですか。

③ 留学生が盆踊りに参加して変わりましたか？

留学生が盆踊りに参加するようになって、華やかで活気が出た (32%)、国際的になった (26%) と、歓迎されている方が多かった。

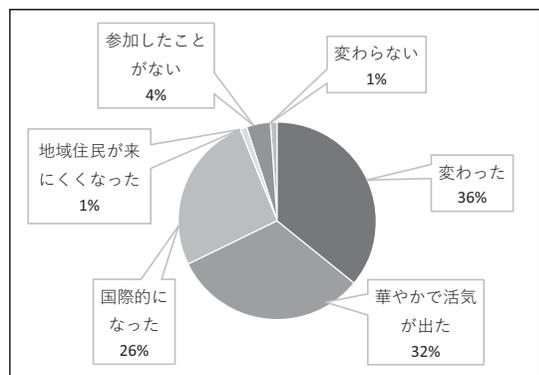


図 5. 留学生が盆踊りに参加して変わりましたか？

④ 留学生が盆踊りに参加するのを、どう
 思いますか。

留学生が毎年盆踊りに参加することを、
 どう思っているか率直にお尋ねし
 てみた。お盆という先祖供養の儀式でもあ
 るので、迷惑ではないかと思っていたが、
 今後も続けてほしいという多くのご感想を
 得た（89%）。

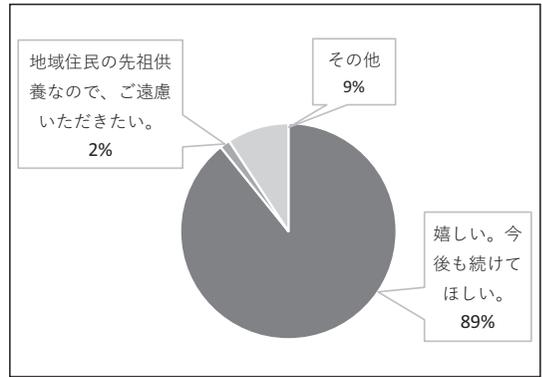


図6. 留学生が盆踊りに参加する
 のを、どう思いますか？

⑤ 三重大学が地域と連携で行っている国
 際交流の行事をご存知ですか。

三重大学が国際交流センター以外に、地
 元の地域と連携で行っている国際交流の行
 事があるか尋ねた。もしあるとすると、秋の
 大学祭くらいしか思い当たらなかった。やは
 り、68%の方が知らないという回答だった。

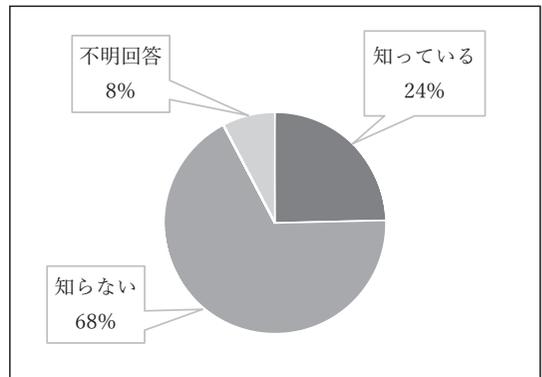


図7. 三重大学が地域と連携で行っている
 国際交流の行事をご存知ですか？

⑥ 今後三重大学と交流を希望する国際交
 流イベントはありますか。

今後三重大学と交流を希望する国際交流
 イベントは、具体的にどんなイベントがあ
 るとよいか伺った。防災に関する交流イベ
 ントを希望する回答もあった（26%）。先
 にも述べたように、白塚地区は津市指定の
 避難ビルが点在するが、専称寺周辺は高い
 ビルも少ないため、地震が起きた際は、真っ
 先に三重大学に行くと呼ぶ声をよく耳にし
 ていた。確かに、防災等の避難訓練など、
 地域と連携した行事を希望する声もあり、
 もっと防災に関する交流イベントがあると
 よいのではないだろうか。

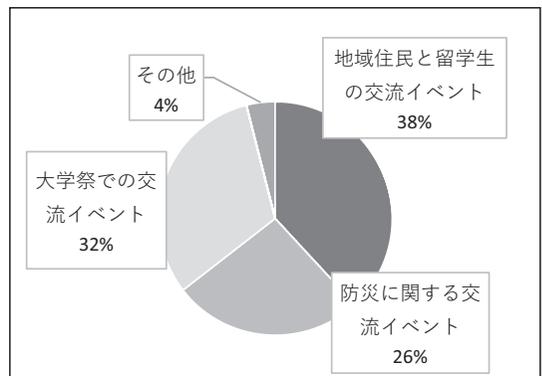


図8. 今後三重大学と交流を希望
 する国際交流イベント

その他、大学祭における地域住民との交
 流イベント（32%）や留学生との交流イベ
 ント（38%）を期待する声もあった。

⑦ その他自由記述

その他自由記述では、毎年多くの留学生に参加していただき、地域が活気づくので嬉しいと、今後も参加継続を望む声が多かった。また、具体的に龍踊りという地元祭りへの参加や荒廃農地の整備の支援、津市清掃 day への参加を望む声、小学生や高齢者との交流活動を期待する声、自国へ帰って日本の思い出話になれば嬉しいという声も聞かれた。

3.2 留学生のアンケート結果から

留学生のアンケートは盆踊り参加後に実施したため、残念ながら 8 名からしか回収できなかったが、ほぼ例年通りの声が聞こえていた。

① 専称寺の盆踊りの感想

盆踊りの感想としては、「楽しかった。機会があったら、また参加したい」(100%) など、留学生は盆踊りを満喫していたようだった。

② 盆踊りのどんな点がよかったですか。

「盆踊りが踊れてよかった」(26%) や「日本の夏の文化の風習がわかってよかった」(26%) など、当初の目的である日本の地域ならではの夏の文化や風習を体験し、理解してもらうことができた。また、当年度はボランティアによる浴衣の着付け教室があり、1人で浴衣を着ることができたこともよかった。大学の貸出の浴衣も選べるくらいの枚数があるので、女子留学生にとっては思い思いの浴衣を着るのも楽しみの一つようだ。

③ 後輩の留学生にも盆踊り体験を勧めますか？

「後輩の留学生も参加できたら、きっと楽しいと思う」(60%)。留学生は帰国後、

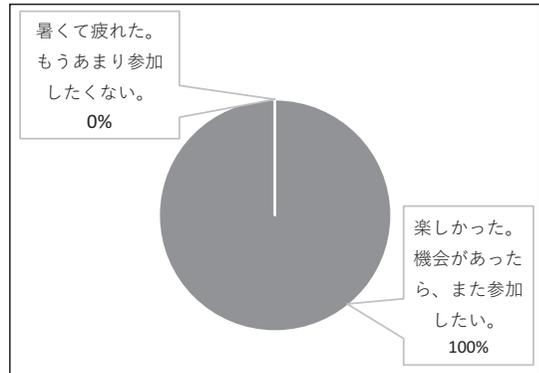


図 9. 専称寺の盆踊りはいかがでしたか？

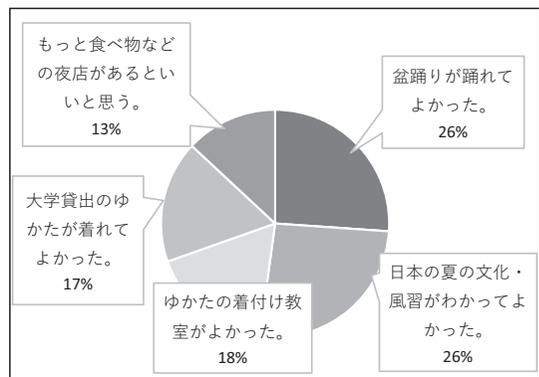


図10. 盆踊りのどんな点がよかったですか？

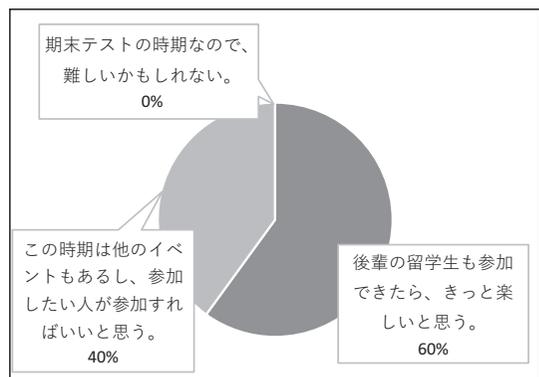


図11. 後輩の留学生にも盆踊りを勧めますか？

留学経験について後輩に話す機会が多いので、ぜひ盆踊り体験も勧めてほしいと思う。また、回答にもあるように、8月の第1週の土曜日は近隣の市町村のイベントも多いせい、他のイベントにも興味のある学生も多く、近年欧米の男子学生の参加が減少傾向にある。

④ 今後も盆踊りなどを通して、地域の方々と交流を続けたいですか？

回答者全員が「今後も盆踊りなどを通して、地域の方々と交流を続けたい」と思っていた（100%）。毎年、盆踊りの会場で、留学生が地域の方々と話す光景も多く見られ、地域の方々と交流できるいい機会となっている。

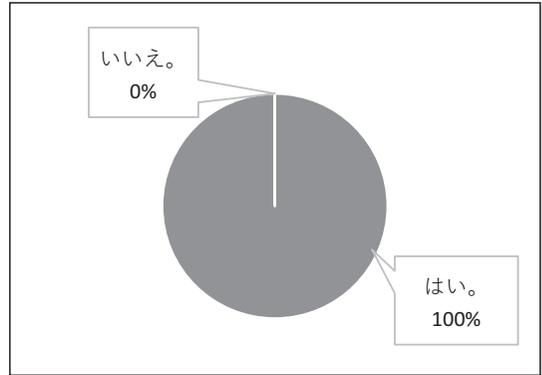


図12. 今後も盆踊りなどを通して、地域の方々と交流を続けたいですか。

⑤ 今後どんな国際交流やイベントを実施したら、地域の方々が参加しやすいと思いますか。

留学生や地域の方々が共に参加しやすい国際交流やイベントはどんなイベントか、参加方法についても聞きたいと思っていたが、あまりいいアイデアはなさそうである。全員が「盆踊りのような地域住民と留学生の交流イベント」（100%）を挙げていた。栗真町屋町の方々にお聞きすると、生物資源学部が地元の酒造店と協働で酒作りを行っていることをご存知だったが、防災や大学祭に関わる交流イベントは実施していない状況が理解できた。

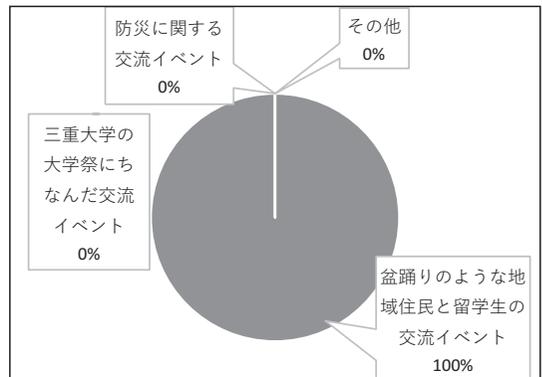


図13. 今後どんな国際交流やイベントを実施したら、地域の方々が参加しやすいと思いますか？

⑦ その他自由記述

「とても暑い日だったけど、浴衣を着ることができ、日本人の方と一緒に踊れて楽しかった」、「盆踊りはとても楽しかった」、「盆踊りは思ったより簡単でした。後輩たちは絶対に楽しいと思う」という感想を得ることができた。

4. 盆踊りの交流に参加した留学生の寄稿、盆踊りの縁をくださった元自治会長さんのお話

実際に盆踊りの国際交流に参加して留学生はどう思ったのか、3人の留学生と栗真町屋町の元自治会長の奥山憲次さんのお話を掲載する。4.1 は 2012 年度工学部特別聴講学生のチョウ・クエンさん（中国出身で日本在住）、4.2 は 2015 年度国際交流センター日本語日本文化研修留学生のアピンヤー・小濱（サエングサワング）さん（タイ出身で日本在住）、2017 年度日本語日本文化研修留学生のカリナ・キム（オレーナ）さん（ウクライナ出身で韓国在住）である。チョウさんは盆踊り体験をまとめ、留学生日本語弁論三重県大会でスピーチした。その原稿を本人の許諾をいただき掲載した。アピンヤーさんとカリナさんは本稿へ寄稿してくれた。奥山憲次さんは、本学の留学生が盆踊りに参加するきっかけを作ってくくださった方で、快く寄稿してくくださった。

4.1 2012 年度工学部交換留学生のチョウ・クエン：盆踊り体験に基づく弁論大会の原稿「私の日本留学生活－踊りましょう－」

皆さんは踊ったことがありますか？踊る時はどういう気持ちですか？私はリラックスでき、ストレスを発散することができます。私は踊る時、元気になります。そして心も体も軽く美しくなると思うし、そして人生が豊かになると思います。世界中が素晴らしく感じられます。だから、私は踊りが大好きです。

私は日本の盆踊りのことを聞きました。とっても行きたくなりました。やっと 8 月 4 日が来て、栗真町屋町の盆踊り大会に参加しました。浴衣を着て、参道の提灯を見て、砂利道を通って寺に入りました。盆踊りの音楽の音がだんだん大きくなり、お祭りの雰囲気が盛り上がっていました。急に音楽が止まって、マイクから「今から、踊りましょう」という放送と同時に元気のいい太鼓の音が聞こえてきました。「掘って、掘って、また掘って、かついで、かついで、ながめて、ながめて、おして、おして、開いて、ちょちゃんがちゃん」。みんな太鼓や音楽に合わせて、輪の中に入り、輪になって踊っていました。みんな笑顔で踊っているのが見えました。あれ、不思議なことが起きました。あまり踊らない友達もこんな楽しい雰囲気では抵抗なく、参加していました。それは踊りの力ですね。私たちは櫓の上で踊るチャンスがあって、楽しかったです。楽しく踊って、昼間の疲れなど消えて、体がかかるくなり、幸せを感じました。



図 14. 盆踊りの風景 (2012)

やぐらの上で踊っている時、昔のダンスのパフォーマンスを思い出しました。私は言葉で表現できない気持ちになって、美しい草原の故郷に帰ったかのように思いました。故郷の広い草原にも輪になって踊るダンスがあります。草原へ旅行に行ったら、焚き火パーティーが一つが一番心のこもった迎え方です。最初遠方からのゲストは松明を持って、火をかけます。

それから、色鮮やかな民族衣装に身を包んだ少女、少年とゲスト、キャンプファイヤーの歌や踊り、周りのゲストの踊りが続きます。「十五の月亮、升上了天空哟、为什么旁边、没有云彩」馬頭琴を引き、モンゴル歌を歌ったり、草原ならではの踊りを踊ったりして、みんなの顔は夜空とともにたき火に映されて、心が癒されていきます。日本と内モンゴルの間に、意外にも同じダンスの形態があることが分かりました。まだ世界中のたくさん国に輪になるダンスがあります。ダンスはすばらしいですね。

次に、ダンスの起源を比べてみました。盆踊りは日本の昔の人が労働した時、踊りを始めました。労働した後に踊ったら、疲れはきっと消えたことでしょう。盆踊りの時、私はこういう楽しい労働したときの気持ちと同じだと思いました。モンゴルの輪になって踊るダンスは、伝統的な祝いの形式です。昔から、内モンゴルの人々は火に特別な敬意を持ちながら、動物や鳥を捕まえた後、多くの食べ物を持ち帰って、それらを火に焼くという習慣があります。ハンターの皆さんは手を繋いで、たき火を回って、嬉しい気持ちを表すために踊る踊りは、今までずっと続けられています。この二つダンスは昔の人の生活から、楽しみのために生まれて来ました。

しかし、不思議なことがあります。非常に遠く離れた日本と中国が共通した踊りがあるのでしょうか。中国の踊りも、日本の踊りも、楽しい気持ちを表すために存在しているものです。しかし、踊りによって、別々な社会背景と規律がありそうです。人々は踊りを通じて、自分の心の中の思い、そして、生命や自然への尊敬の気持ちを表します。踊る人々は民族文化に自信を持ち、自分たち民族の誇りを感じます。ですから、踊る人は、命の意義を持って楽しさをみんなに伝えることができます。

ダンスをこのように考えると、ダンスは世界の共通言語として、全世界の絆になります。人々は踊りを通じて、お互いに理解し、コミュニケーションが出来るようになります。世界の人々が、幸せな未来のために、楽しさと嬉しさを分かち合って踊りましょう！最後に私



図 15. 2015 年の盆踊り交流会の参加者の記念撮影

が経験した盆踊りを披露して、私の発表を終わらせていただきます。「掘って、掘って、また掘って、かついで、かついで、ながめて、ながめて、おして、おして、開いて、ちょちょんがちょん。月が出た、出た、月が出た (ヨイヨイ)、三池炭坑の上に出た」。



4.2 2015年度日本語日本文化研修生：アピンヤー・小濱 (サエングサワング) さん (タイ) 図 16. 2017年の盆踊り交流会の参加者の記念撮影

2015年三重大学の盆踊りを参加したタイ人の元留学生です。当時の思い出は、とても楽しい経験でした。夕方になり皆で浴衣に着替えました。日本の浴衣や着物に憧れていました私はとてもワクワクしていました。ずっといつか浴衣や着物を着て外で歩いてみたかったです。着替えが終わりましたら、皆で国際交流センターの前で集合し、列で大学の近くのお寺まで歩いて行きました。当時は夏だったので、とても暑かったですが、友達とお喋りながら歩いているので、楽しさは暑さに負けなかったです。

お寺に着いたら、太鼓の音でとても盛り上がる気持ちになりました。太鼓のリズムに合わせて皆が同じ踊り方していました。私は初めてなので、中々追いついていけなかったのですが、楽しく踊れました。とても楽しい踊りだったです。お寺内では、屋台もたくさんありました。踊り終わったら、食べ物を買ってたくさん食べました。お祭りが終わりましたら、皆で一緒に寮まで歩いて帰りました。とても素敵なお祭りでした。

タイ国にも日本の盆踊りと似たようなお祭りが 있습니다。タイでは「ラムウォン」と言います。「ラム」は踊りという意味で、「ウォン」はサークルという意味です。「ラムウォン」祭りは、年何回か行われるお祭りです。日本の盆踊りと同じようにお寺でやることが多いです。皆で昔の衣装を着て、サークルで同じ踊り方で踊ります。リズムは日本の盆踊りより早いです。とても盛り上がる踊り方です。



皆さんも是非夏の盆踊り参加してみてください。とても良い思い出になるとと思います。

図 17. 専称寺の門の前で (右端がアピンヤーさん)

4.3 2017年度日本語日本文化研修生：カリナ・キム (オレーナ) (ウクライナ)

今から5年前、2017年に私は日研生として三重大学に来ました。三重大学は多文化交

流会、日本文化体験レッスンなど様々なイベントを開催しているため、とても楽しい留学生生活を過ごすことができました。特に盆踊りのお祭りの日が今でも記憶の中に華やかに残っています。きれいな浴衣を着させてもらい、留学生の仲間たちと日本人の学生とともに、町屋盆踊りのお祭りに参加しました。美味しい物を食べたり、金魚すくいにチャレンジしたりもしましたが、私にとって一番楽しかったのはやはりみんなで盆踊りを踊ることでした。

私は母国ウクライナにいたときから日本の文化に興味を持っていて、ふるさとで行われる日本文化イベントによく参加しました。あるイベントで盆踊りクラブのメンバーに声をかけた結果、賛同を受け日本文化センターで盆踊りの練習をやり始めました。しばらくしたら、私もイベントで踊ったり盆踊りを教えたりしました。ですから、津市でお祭りの時には、知っている曲が流されたらたん、勇気を出して、真ん中にある櫓に上がり踊りました。地元で何回も練習してきた踊りを日本で踊っているなんて、不思議な気持ちで胸がいっぱいでした。踊り終わってからたくさんの方々になぜ上手に踊れるかと聞かれ、面白い会話もできました。

私にとって留学の一年間は人生の中で一番楽しくて幸せな時期でした。色々な体験をさせていただいたおかげで、より自然な日本語を学んだ上に、日本の歴史や文化について知識を深めました。留学の時にしか得ない経験が山ほどありますので、留学生は恐れずに新しいことに挑んでみてほしいと思います。



図 18. 櫓の上の盆踊り体験と金魚すくいの体験（カリナさん）

4.4 栗真町屋町元自治会長 奥山憲次さん

栗真町屋町主催の盆踊り大会は30年前から始めた伝統ある祭りで、この地区の親睦を図る行事の一つだった。当時は300人くらいの方が盆踊りに集まっていたが、最近は少子高齢化もあり、参加者が徐々に少なくなっていた。そんなときに、国際交流センターの留学生が浴衣を着て盆踊りに参加してくれるようになり、盆踊りが大変活気づくようになった。いつもは、ただ通りを通行している大学生の姿だけを見ていたが、このように大学生

と一緒に輪の中に入って踊ってくれるとは夢にも思わなかった。みんないろいろな国から来ていて、喜んで参加してくれる姿を見て嬉しかった。外国の方は気持ちが明るいし、こちらも気持ちが若返るようだった。この 2 年はコロナで中止になったが、このまま盆踊りを通じて交流を継続して行ってほしいと思っている。

留学生が盆踊りに参加してくれるようになった同じ時期に、元学長が定期的に三重大学で地元の者達との懇親会を開いてくれるようになった。こんなことは珍しく親しみを感じた。近年では、秋の学園祭も楽しみの一つであるが、9 月の敬老会に、大学のサークルの方が音楽を演奏しに公民館に来てくれたりしている。また、夏の龍踊り行事では、神輿の担ぎ手として大学生が参加してくれたり、特定非営利活動法人 (NPO) 町屋百人衆が主催する 3 月に一度の町屋海岸の清掃活動にも、大学生が大勢参加してくれたりして、大変ありがたく思っている。現在はコロナで休止中でもあるが、ぜひこれらも継続して行ってほしいと思う。

最後に、今年専称寺の鐘撞堂の改築があった。この地区には冬の正月行事として、近くの神社の千王神社にお参りをし、その後専称寺で鐘をつくという風習がある。年越しそばや餅を出したりしている。留学生にはこの冬の風習にも一度足を運んでほしいと思う。

三重大学のお膝元にある栗真町屋地区と三重大学は、今まで良好な関係を維持してきたが、持ちつ持たれつということで、今後ともよろしくお願い致します。

5. 留学生と地域の人々との国際交流と地域の国際化

本稿では 2018 年に留学生および地域の方々にアンケート調査し、その結果について報告した。留学生は盆踊り交流会で浴衣を着て参加し、地域の方々と一緒に踊ることで、異文化体験を心から楽しんでいた。一方、地域の方々にとっても、年々参加者が減少していた盆踊りが国際豊かに活気づいたことに、喜びを感じ歓迎していたことがわかった。留学生も地域の方々も盆踊りを通して国際交流ができ、今後も継続してほしいという声が多かった。

4 で述べたように、チョウ・クエンさんは、故郷モンゴルのお祭りへの思いを重ね合わせて、盆踊り体験を堂々とスピーチしたばかりでなく、弁論大会で踊りも披露した。その原稿はイキイキと当日の盆踊りの様子が描かれていた。アピンヤーさんの寄稿も、当日の盆踊りへ向かう留学生達のワクワク感や留学生のはしゃいだ様子を伝えてくれていた。カリナさんの寄稿は、ウクライナにいたときから盆踊りのことを知り、踊り方を練習していたという驚く内容であった。回顧すると、これまで櫓の上で踊ったのは、チョウ・クエンさんとカリナさん 2 人だった。奥山元自治会長さんには、栗真町屋町の盆踊りへのお誘い

やお世話を受けただけではなく、後継者にも本事業を繋げていただき感謝でいっぱいである。

盆踊りを通した国際交流は、年々留学生と地域の人々との接点として意義あるものになっていった。留学生が浴衣を着て日本独特の盆歌に合わせ、見様見真似で輪の中で踊りに参加していく過程で、その祭りへの期待と高揚感は、世界共通のものであることがわかった。現在では、盆踊りという日本文化や風習の異文化体験が三重大学留学の思い出の一つとなって、後輩達に語り継がれている。この事業が10年も続いたのは栗真町屋地区の自治会のご協力があるのものである。

一方、地元の国際交流の担い手も高齢化が進んでいることは否めない。地方での多文化共生の意識作りがようやく芽生えたかと思うと、理解・支援して下さる方々の高齢化という次の課題がある。本学がこの栗真町屋町に存在し、三重大学が国際化を目指し留学生の受入れや世界の協定校との交流事業を継続していく以上、多文化共生の意識や地域の人々と共に、次世代へ繋げる異文化理解や国際交流の努力を、今後も継続を図る必要があると思われる。

1980年代以降、三重県でも外国籍住民が増加し、定住化の支援や日本語教室の拡充など多文化共生社会の構築に向け、個人レベルから各自治体独自の交流活動へと積極的に行われてきた。今後は海外からグローバル人材として日本への移住者が増え、ますます多様な背景を持つ人々のコミュニティが形成されていくであろう。そんな地域の国際化の中で、自然な形でコミュニケーションが行われ、地域の方々の和が拡充されていくためにも、本事業の盆踊りのような地域に根付く文化や風習に基づく交流の場が、次世代の地域の国際化を形成する精神的礎となっていくのではないだろうか。

この津は、伊勢神宮へのおかげ参りという歴史と文化が育った土壌が残る地である。伊勢の地を訪れた人々が、日本各地ではなく今度は世界各地へこの地の文化が拡散されていく。留学生は時代が違っても客人は客人である。日本文化の良さをその地で発信し、客人が各地で三重や日本の架け橋となって活躍することを祈ってやまない。多文化共生社会やSDGS⁽⁴⁾が叫ばれる中で、留学生と地域との国際交流の在り方は多種多様であるが、双方にプラスになる形で将来につなげていきたい。

謝辞：この 10 年留学生を快く迎えてくださった栗真町屋地区の皆さん、栗真町屋町元自治会長の奥山憲次さん、留学生を代表して寄稿してくださったチョウ・クエンさんやアビンヤーさんやカリナさん、毎年盛夏に留学生の着付けにご協力くださった花見槇子元教授のご協力に感謝申し上げます。

付記：カリナさんの故郷ウクライナの人々の平和を心よりお祈り致します。

注

1. 「留学生 30 万人計画」とは、日本が世界に対してより開かれた国へと発展する「グローバル戦略」の一環として、2020 年までに日本国内の外国人留学生を 30 万人に増やすことを目標とした文科省の施策である。2019 年に留学生数は 31 万人に達した。
2. 2020、2021 年度は、コロナ禍により三重大学の海外協定校より交換留学生の受入れはなかった。
3. 真宗大谷派、三重県津市栗真町屋町 872
4. SDGs (Sustainable Development Goals)、JAPAN SDGs Action Platform 外務省 (mofa.go.jp) <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html> (2021.12.19)

参考文献

- 江原宏 (2012) 「国際交流・国際協力の拡大と活性化に向けた三重大学における人材養成の取り組み」『Journal of International Cooperation for Agricultural Development 2012』12、pp.58-64.
- 奥村圭子・伊藤亜希子・伊藤孝恵 (2010) 「地域の国際化がもたらす可能性—地域での異文化間交流—」『留学生センター紀要』6、pp.1-14.
- 蒲池勢至 (2012) 『お盆のはなし』法蔵館
- 国際交流センターの活動 (2009~2019) 『三重大学国際交流センター年報』三重大学国際交流センター
- 関沢まゆみ・国立歴史民俗博物館 (2015) 『盆行事と葬送墓制』吉川弘文館

調査報告

コロナ禍での授業形態にかかる学生の意見調査： ハイブリッド授業、オンデマンド授業、リアルタイムでのオンライン授業

正 路 真 一

Research on Students' Opinions on Class Formats under COVID-19 impact: On-demand, Hybrid, or All Online Real-time Classes

SHOJI Shinichi

〈Abstract〉

As Covid-19 infection spread in Japan in the early 2020, Mie University classes are conducted in different formats, like many other schools in Japan. The author utilized two methods in one of his classes, which are, first, on-demand format, in which students watch recorded class movies, and second, hybrid format, in which physically attending students and remote students appear together in the same class meeting. This paper reports students' preferences on different class meeting formats, specifically for on-demand, hybrid, or real-time all online classes. The questionnaire responded by 30 students from a Mie University class indicated no consistent preference of the students.

キーワード：コロナ禍、ハイブリッド授業、オンデマンド授業、オンライン授業、リアルタイム

1. はじめに

2020年初頭に始まるコロナ禍の拡大以来、本学では部局間あるいは科目の種類（座学、実習、演習など）によって対応の違いはあるものの、①受講学生全員を対象としたオンライン授業と、②対面受講とオンライン受講を組み合わせたハイブリッド授業とを中心に授業が行われてきた。本学で推奨されている②ハイブリッド授業とは、対面受講する学生とオンライン受講する学生が同時に同じクラスを受講するというものである。また、①受講学生全員を対象としたオンライン授業については、ZOOMやMicrosoft Teamsを用いてリアルタイムで行うものと、あらかじめ録画した授業に学生が個々にアクセスするオンデマンド形式のものがある。筆者が担当する国際交流センター科目「三重の社会と文化」（教養教育開放科目「三重学：三重の社会と文化」）では、2021年度前期において、ある週はオンデマンド形式、またある週はハイブリッド形式といった具合で、二つの形式を組み合わせる授業を進めた。本稿はこの科目の受講生がオンデマンド形式を好んだか、ハイブ

リッド形式を好んだかについて、学期末に行ったアンケート結果を基に報告するものである。また、アンケートの結果、オンデマンド形式やハイブリッド形式よりも、受講者全員がリアルタイムでオンライン受講をすることを希望する学生も一定数いたので、こちらもあわせて報告する。

2. 先行研究

2020 年および 2021 年には、日本全国の大学では授業のオンライン化が急速に進み、その結果大学生および大学教職員の IT リテラシーが急速に向上するという効果をもたらした (金子・マーフィー 2021, 岡田他 2020)。またその過程で生まれた様々な形態の授業形態について、学生の反応やその学習効果についても多くの報告がなされている。その一つが、東洋大学現代社会研究所 (2020) が実施した「コロナ禍対応のオンライン講義に関する学生調査」で、これはオンライン授業 (リアルタイムとオンデマンドの両方を含む) と対面授業に対する学生の意見を聴取したものである。この調査の対象となったのは全国の 15 大学で、合計 1426 件の回答が寄せられた。この調査の結果によると、オンライン授業を希望する学生と対面授業を希望する学生はそれぞれ 40% と 33% となっており、オンライン授業の希望者の方がやや多い。ただし、演習科目についてはオンライン授業希望者 (29%) よりも対面授業を希望する学生が多かった (45%)。これは教員や他の受講者とのコミュニケーションを求める学生が多いためと推測されるが、しかし同じくコミュニケーションが必要とされるであろう語学 (英語) 科目についてはオンライン授業希望者 (30%) と対面授業希望者 (32%) は同程度であった。

学習効果については、オンライン授業の方が学習効果が上がったとする学生が 38%、上がらないとする学生が 35% であった。一方オンライン授業の方が講義の集中度が増したとする学生は 33% であったのに対し、減ったとする学生は 39% とやや多い。また授業のオンライン化によって学生の負担が増えたという回答が 77%、教員とのコミュニケーションが減ったという回答が 57% となっている。これらの回答がオンライン授業の課題を示唆しているにも関わらず、全体としてオンライン授業希望学生の方が対面授業希望者を上回った理由としては、主に以下の 4 つの点が挙げられた。

「通学時間がかからない」 82%

「自分のペースで学習できる」 68%

「自宅で学習できる」 66%

「教室移動がない」 61%

これらの回答は全て受講の利便性に関するものだとも判断できるが、「自分のペースで学習できる」という回答に関しては、学習効果の向上に寄与するものだとも解釈できる。例えば三苫ら（2020）は、特にオンデマンド形式の授業では、受講学生が分からなかった箇所を巻き戻して繰り返し視聴することができる、または授業内容の関連情報を調べながら視聴することができることが、学生たちの学習効果を高める可能性があるとしている。

東洋大学の調査結果に戻ると、オンライン授業の劣る点としては、下の6点が挙げられた。

「自宅だと他の誘惑に負けそうで授業に集中できない」43%

「（ネットワークやデバイスの不具合等で）音声や動画が途切れて聞き逃すことがある」39%

「（オンデマンド授業について）開始・終了のメリハリがない」36%

「教員ごとに使用するシステム（ZoomやWebex等）が異なるため、混乱しやすい」36%

「対面時よりも単調に感じてしまう」35%

「他の受講生とのディスカッションや交流が少ない」34%

これらは回答がやや多岐にわたるため回答割合が全て50%以下となっているが、その回答内容は、主に学生の緊張感を維持する臨場感やダイナミクスの欠如、そしてハード面での技術的な支障の二つに分けられる。このうち最も多くの回答を集めた「自宅だと他の誘惑に負けて授業に集中できない」という点は、オンライン授業が学生自身のやる気と努力に依存する（千田・金子・千葉 2020）という側面を示唆している。

以上の調査結果から、オンライン授業と対面授業に対する学生の希望がどちらか一方に振れることはなかった。オンライン授業を好む学生もいれば、対面授業を好む学生もいるということである。ただ調査結果から読み取れるものとしては、下のようなオンライン授業の利点と欠点がある。

利点) 受講場所に関する利便性

受講時間の利便性（受講のペースを学生個人が調整できること）

欠点) ソフトウェアの不具合等の技術的な問題

授業のダイナミクスの欠如（集中できない・単調に感じる・クラス内での交流が少ない）

このうち、授業のダイナミクスの欠如について、城西大学のアンケート調査報告（石井

2021) においては特に学生が授業に集中できないという点が問題視され、可能な限り対面またはハイブリッド型の講義を推奨すべきであると論じられている。ただし城西大学の学生の、オンライン講義および対面講義双方のメリット・デメリットについての学生の回答は非常に多岐にわたっており、このアンケート調査から確からしい結論を見出すのは難しい。また、特にロシア語クラスの受講者にとってのオンライン講義と対面講義(ハイブリッド形式を含む)のメリット・デメリットを調査した京都外国語大学の報告(水野 2021)によると、学生が考えるオンライン講義のメリットは時間的・場所的利便性にかかるものが多く、対面またはハイブリッド講義のメリットは学習効果に直接関わるものが多いとしている。水野は、特に語学系の授業においては、質問がしやすいという対面講義のメリットが語学学習者の「有用性の欲求(学習者が、ロシア語ができるようになりたい、あるいはロシア語の授業内容を理解したいと感じること)」を満たすのに有効に作用し、また人と人とのインタラクティブな交流を可能とする対面講義のメリットが語学学習者の「関係性の欲求(学習者が、教師や仲間と、互いに協力的にロシア語学習に取り組みたいと感じること)」を満たすのに有効に作用するとして、対面授業の優位性を主張している(水野 2001, 佐山 2015)。ただし、全員がリアルタイムで参加するオンライン授業においてもインタラクティブな交流は観察されている。杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部におけるオンライン授業では、オンラインでのペアワーク、グループワークが「楽しかった」とする学生の感想が圧倒的に多く見られ、また担当教員は、オンライン授業内での活気が高まっている様子が観察されたとしている(小塚・伊藤 2020)。

一方、東京医科大学のアンケート調査(三苦他 2020)によると、オンデマンド型の方が授業内容を理解しやすく、学習しやすいと回答した学生が 68.6%、これに対して対面授業の方が理解しやすく、学習しやすいと回答した学生は 13.8%に過ぎなかった。またこの調査によると、回答した学生のうち 65%の学生が 1.5 倍から 2 倍の時間をかけてオンデマンド型の授業動画を視聴していたという結果が現れた。さらに広島大学のアンケート調査(蓮沼・服部 2021)でも、従来の対面講義よりもオンデマンド講義およびリアルタイムでのオンライン講義の方が良いとする学生が多く、ここでもオンデマンド講義を復習のための教材として活用している学生の例を紹介している。こうしたオンデマンド形式の利便性が、学習内容を深く理解し、知識を定着させる効果があるという可能性がある(喜屋武・仲井間 2021)。その他の例としては、香川大学のオンデマンド講義では(岡田他 2020)、コロナ禍以前には授業時間内に学生たちにかかせていたレポートをオンデマンド講義視聴後に期限内にかかせるようにしたところ、レポートの質が向上していると評価された。

3. 調査

2021年度前期に筆者が担当した科目「三重の社会と文化」では、オンデマンド形式とハイブリッド形式の両方を用いて授業を行ったことは前述の通りである。この二つの科目の受講学生を対象に、学期末にアンケートを行い、オンデマンド授業とハイブリッド授業のどちらの形式の方が満足度が高かったか、またその他の授業形態を望んでいたかについて調査した。実際のアンケートの質問と回答選択肢は下の通りである。

質問：オンデマンド授業、ハイブリッド授業についての意見を書いてください。（複数回答可）

- ①ハイブリッド授業よりもオンデマンド授業の方が良い。
- ②オンデマンド授業よりもハイブリッド授業の方が良い。
- ③オンデマンド授業もハイブリッド授業も良い。
- ④オンデマンド授業もハイブリッド授業も良くない。
- ⑤全員がリアルタイムのオンライン授業を受けるのが良い。
- ⑥コロナ禍でも、全員が教室で授業を受けるのが良い。

→どうして上の回答を選んだか簡単に説明してください。（自由記述回答）

この調査の主眼は筆者が実施したオンデマンド形式とハイブリッド形式を比較するものである。その目的に鑑みると回答選択肢は①②③④だけでも十分であったが、オンデマンドとハイブリッド以外の授業形態を望む学生が多数いる可能性も考慮し、⑤と⑥の選択肢を加えた。さらに、回答者には①～⑥の中から選んだ後、その選択肢を選んだ理由を自由記述で書かせた。なお、この科目の受講者には日本人と外国人留学生がおり、回答者30名のうち外国人留学生が11名、日本人学生が19名であった。授業中の指導言語は英語であったため、日本人の中にも外国人留学生の中にも、自由記述回答を英語で書いた学生と日本語で書いた学生がいた。

4. 結果

4.1 希望する授業形態

アンケート調査の中で、選択回答式設問の結果を表1に示す。複数回答可としたため、回答者数と回答数は一致していない。また、学生の自由記述回答を含む調査結果の詳細は付録に掲載する。

まず外国人留学生の結果を見てみると、①オンデマンド授業の方が良いという意見も②ハイブリッド授業の方が良いという回答もともに1件ずつと少ないが、⑤全員がリアルタ

表 1 オンデマンド授業、ハイブリッド授業を含む授業形態についての学生の意見

回 答 選 択 肢	外国人留学生 (回答数 11)	日本人学生 (回答数 24)	合 計 (回答数 35)
①ハイブリッド授業よりもオンデマンド授業の方が良い	1 (9.1%)	9 (37.5%)	10 (28.6%)
②オンデマンド授業よりもハイブリッド授業の方が良い	1 (9.1%)	3 (12.5%)	4 (11.4%)
③オンデマンド授業もハイブリッド授業も良い	7 (63.6%)	6 (25.0%)	13 (37.1%)
④オンデマンド授業もハイブリッド授業も良くない	0	0	0
⑤全員がリアルタイムのオンライン授業を受けるのが良い	2 (18.2%)	5 (20.8%)	7 (20.0%)
⑥コロナ禍でも、全員が教室で授業を受けるのが良い	0	1 (4.2%)	1 (2.9%)

イムのオンライン授業を受けるのが良いという回答が 2 件あったことから、比較的、ハイブリッドまたは全員オンラインでの、リアルタイムでの受講を希望する学生の方がやや多いと推測される。一方日本人学生は、①オンデマンド授業の方が良いという回答が最も多く、②ハイブリッド授業の方が良いという回答は 3 件にとどまったことから、オンデマンドを希望する学生の方が多いと考えられる。ただし、⑤全員がリアルタイムのオンライン授業を受けるのが良いとする回答が 5 件あったことから、オンデマンドを希望する学生と、リアルタイムでの受講（ハイブリッドまたは全員オンライン）を希望する学生の数は同程度だと考えられる。特にリアルタイムでの受講形態の中では、②ハイブリッド授業の方が良いという回答よりも⑤全員がオンライン授業を受けるのが良いという回答の方が外国人留学生、日本人学生ともに多かった。また、日本人学生の中で、②ハイブリッド授業の方が良いと回答した 3 名は全て⑤全員がリアルタイムのオンライン授業を受けるのが良いという回答を複数選択した。

選択肢の中で、③オンデマンド授業もハイブリッド授業も良いという選択肢を選んだ回答も多かったが、この回答に添えて記述された自由記述式回答（「どうして上の回答を選んだか簡単に説明してください」）の内容を見てみると、オンデマンドの利点を記述した回答が 1 件、逆にハイブリッドの利点を記述した回答が 2 件あった。具体的には、③オンデマンド授業もハイブリッド授業も良いという選択肢を選んだ外国人留学生の一人は、「I have no particular opinion. But I find it easier to watch a video than take a class on Zoom.」と記述し、どちらかと言えばオンデマンド形式を好むことを示唆している。逆に、別の二人の外国人留学生は、「今の特殊事態なので、全員が教室で授業を受けることが難しいです。でも、私は対面授業のほうが好きです。ハイブリッド授業はより便利だと思います。」「厳しい状況ですので、ネットで動画を見ても動画会議を見ても大丈夫だと思います。で

コロナ禍での授業形態にかかる学生の意見調査：ハイブリッド授業、オンデマンド授業、リアルタイムでのオンライン授業も、授業の動画が開きにくい時もありますので、ビデオ会議がいいと思います。」と記述し、どちらかといえばリアルタイムでのハイブリッド授業（およびリアルタイムで全員オンライン授業）を希望していることが伺える。

日本人の自由記述回答も同様で、③オンデマンド授業もハイブリッド授業も良いという選択肢を選んだ日本人学生のうち一人が「動画を何度も見返せるのがとても良かった」と記述したが、この学生はどちらかといえばオンデマンドを好んでいるようである。逆に、「When the on-demand classes continued, there were times when they were boring.」とオンデマンドを希望しないことを伺わせる回答をした日本人学生も一人いた。

4.2 それぞれの受講形態を希望する理由

4.2.1 オンデマンド形式を希望する理由

ここでは、回答者の自由記述回答に記された、それぞれの授業形態を希望する理由について述べる。まず、オンデマンド形式の優位性を訴えた自由記述回答の中では、その時間的利便性を記述した回答が最も多く、6件あった。その例としては、「Because it's more convenient to watch videos on demand at any time.」、「効率がいいし、時間を有効的に使えるから。」などの回答が典型的である。その他の少数意見としては、「オンデマンドの方が濃い授業ができ、ハイブリッドの場合はどうしても質が落ちやすいため」という学習の質に言及した意見、そして「リアルタイムのオンライン授業だと授業に集中できないから」との意見があった。

4.2.2 ハイブリッド形式を希望する理由

ハイブリッド形式での受講を希望する理由として学生が挙げた中で最も多かったのは、他の学生と実際に会って交流できるためとしたもので、3名の学生から挙げられた。具体的な回答としては、「By meeting directly with teachers and other students in the class we can get to know each other better because I think building connections is also an important part.」、「I think it's better to have the feeling that you're taking classes with someone.」、「できるだけ多くの人が教室で授業を受けられる環境でのほうが留学生も日本人も関係なくかわりやすいと思うし、できれば対面で実践的に自分の英語力を身につけたいと感じたから。」というものであった。その他の少数意見として、「When the on-demand classes continued, there were times when they were boring.」、「(オンデマンドは) 授業の動画が開きにくい時もありますので、ビデオ会議がいいと思います。」といった、オンデマンド形式にかかる集中力維持の困難や技術的な問題を挙げた回答があった。

4.2.3 全員でオンライン受講する形式を希望する理由

次に、オンデマンド形式でもハイブリッド形式でもなく、全員でリアルタイムでオンラ

イン受講する形式を希望する学生の、自由記述式回答に見られる理由であるが、ハイブリッド希望学生と同じく、他の学生との交流ができる点を述べた回答が約半数あった。残りの半数は、「オンデマンドだと、授業時間に見ずに後回しにしていまいがちだから」、「Because I feel very confused about which classes are over and which classes are not over yet.」という、オンデマンドの欠点を記述した回答であった。これらの欠点はハイブリッド形式でも解消できると考えられるが、これらの回答を書いた学生は両方、受講生全員がリアルタイムでオンライン受講をするという回答選択肢を選んでいる。つまりこれらの学生の回答の意味するところは、対面の有無に関わりなく、リアルタイムで受講しなければならないという制約を設けた方が受講しやすいということだと思われる。

5. 考察とまとめ

本稿に報告する調査において、筆者が実施したオンデマンド形式の方が学生にとって満足度が高かったのか、またはハイブリッド形式の方が満足度が高かったのか、それともどちらでもなく全員がリアルタイムでオンライン受講することが望ましかったのかについて、明確な結果は得られなかった。一定数の学生がオンデマンド形式を好み、また別の一定数の学生がハイブリッド形式を好み、さらに全員リアルタイムでオンライン受講することを好む学生もいる。ただ、ハイブリッド希望者は、その理由の多くが他の学生との交流を望んでいることから、協働学習に対する意欲の高い学生たちだと解釈できる。しかしオンデマンド希望者たちの学習意欲が低いかというところとは言い切れず、前述のように、オンデマンド形式の方が集中できる、また内容の濃い授業が受けられるといった回答をした学生たちもいた。これらの回答をした学生からは個人学習に対する意識の高さを感じられる。

おそらく学生個々の学習スタイルにより、その希望する受講形態は違うのであろうと推測できる。それならば、多くの先行研究における学生を対象としたアンケート調査の回答が多岐に渡り、一貫した傾向が見出せないのは、ある意味当然の結果ではないだろうか。また、それぞれの受講形態にはそれぞれに強みがあり、弱みがある。例えば本調査の結果にも現れた通り、対面授業（または一部対面を含むハイブリッド形式）はクラスメイトや担当教員との生の交流ができるであろうし、オンデマンド形式は受講学生が聞き逃したところを繰り返し再生して理解を深めることができる。また、そもそも 2020 年度以来オンライン授業が導入された理由として、オンデマンドを含むオンライン授業にはコロナ感染のリスクを最小限に抑えることができるという利点がある。従って、今後の調査の展望としては、どの受講形態が学生の満足度が高いか調べることを目的とするのではなく、それぞ

コロナ禍での授業形態にかかる学生の意見調査：ハイブリッド授業、オンデマンド授業、リアルタイムでのオンライン授業
れの受講形態の弱みをどのように埋められるかということに重点を置いて進められるべきではないかと考える。例えば筆者を含む多くの教員がオンデマンド講義後の学生のコメントを共有して学生の横の繋がりを作ろうとしていると思われるが、こうした取り組みの効果を図ることが重要となる（武田・關根 2020）。本稿やその他類似の先行研究は、その前段階として、それぞれの受講形態の弱みは何かを把握するためのものであると位置付けられる。

参考文献

- 石井龍太（2021）「対面・オンラインのハイブリッド型式による大人数授業の取り組み」『教育実践研究』vol.17, 125-158.
- 岡田宏基・坂東修二・荒木伸一・市原多香子・黒滝直弘・上田夏生（2020）「オン・デマンド講義配信を用いた香川大学医学部での試み」『医学教育』vol.51, 228-230.
- 金子健彦・ティモシー・マーフィー（2021）「遠隔 Zoom 会議システムを用いた英語講義の実践報告」『和洋女子大学紀要』vol.62, 163-166.
- 喜屋武亨・仲井間憲志（2021）「COVID-19 感染拡大に伴う大学における遠隔授業の実践報告－オンデマンド型ポスター発表形式による小児疾病への理解を深める学修の成果と課題－」『日本健康教育学会誌』vol.29, 95-101.
- 小塚暁絵・伊藤怜子（2020）「杉野服飾大学におけるインタラクション重視の双方向型英語オンライン授業の実践」『杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要』vol 19, 22-32.
- 佐山豪太（2015）「ロシア語学習者の動機づけの構造：自己決定論における『有能性、自律性、関係性』の分析を中心に」『ロシア語ロシア文学研究』vol.47, 163-179.
- 千田みゆき・金子優子・千葉今日子（2020）「新型コロナウイルス感染症対策の中での授業の工夫－1年性必修2020年度看護学生のためのリテラシーの場合－」『埼玉医科大学看護学科紀要』vol.14, 23-26.
- 武田裕子・關根美和（2020）「オンデマンド講義におけるアクティブ・ラーニングの試み：新1年生を対象とした「健康の社会的決定要因（SDH）」の授業」『医学教育』vol.51, 268-269.
- 東洋大学現代社会総合研究所 ICT 教育研究プロジェクト（2020）「コロナ禍対応のオンライン講義に関する学生意識調査」<https://www.toyo.ac.jp/-/media/Images/Toyo/research/labocenter/gensha/research/52395/1questionnaire.ashx?la=ja-JP&hash=C36CFE9B7AD656C60987AAB3BE92B314052C9E19>

蓮沼直子・服部稔 (2021) 「広島大学医学部医学科におけるオンライン授業システムの構築～Microsoft Teams を用いたオンライン講義からオンライン臨床実習までこの半年を振り返る」『薬学教育』 vol. 5, 1-6.

水野庄吾 (2021) 「ポストコロナ時代のロシア語教育 – 外国語専門課程学生が求める講義とは：京都外国語大学ロシア語学会を例に –」『ユーラシアへのまなざし』 vo.1, 25-35.

三苫博・原田芳巳・山崎由花・内田康太郎・五十嵐涼子・大滝純司 (2020) 「対面授業は、オンデマンド授業より優れているのか？」『医学教育』 vol.51, 266-267.

付録 アンケート回答一覧

回答者	回答選択肢 ①ハイブリッド授業よりもオンデマンド授業の方が良い ②オンデマンド授業よりもハイブリッド授業の方が良い ③オンデマンド授業もハイブリッド授業も良い ④オンデマンド授業もハイブリッド授業も良くない ⑤全員がリアルタイムのオンライン授業を受けるのが良い ⑥コロナ禍でも、全員が教室で授業を受けるのが良い	
外国人 1	回答	①ハイブリッド授業よりもオンデマンド授業の方が良い
	上の回答を選んだ理由 (原文ママ)	録画されたレッスン形式は生徒にとって利便性が高く、自由な時間を効果的に尊重することができるので、私は録画されたレッスンを好んでいます。
外国人 2	回答	②オンデマンド授業よりもハイブリッド授業の方が良い
	上の回答を選んだ理由 (原文ママ)	If possible, I think the Hybrid class is a good choice. Because sometimes online learning is not very effective, by meeting directly with teachers and other students in the class we can get to know each other better because I think building connections is also an important part of international classes. But everything depends on this pandemic condition, hopefully, everything can get better quickly and classes can run normally again in the future.
外国人 3	回答	③オンデマンド授業もハイブリッド授業も良い
	上の選択肢を選んだ理由 (原文ママ)	I think as long as I can learn knowledge, I don't care much about the form of teaching.
外国人 4	回答	③オンデマンド授業もハイブリッド授業も良い
	上の選択肢を選んだ理由 (原文ママ)	The on-demand format is good in that there may be some problems because it is accessed from several countries, and the Hybrid class is good in that I can see teachers' and other peoples face and it makes me think I'm not alone.

外国人 5	回答	③オンデマンド授業もハイブリッド授業も良い
	上の選択肢を選んだ理由（原文ママ）	I think that meet friend in class is quite necessary in order to gain a mutual relationship to understand better about japanesse culture and how to interact with real japanesse student in real time but sadly that I still cant have the permit to come to japan so I cant join the excitement of study in class. But I myself not think the on demand video bad because I can replay It for a few times for understanding more about the lecture in class. Thank you so much for shoji sensei and all of my friend from mie studies class you guys are amazing.
外国人 6	回答	③オンデマンド授業もハイブリッド授業も良い
	上の選択肢を選んだ理由（原文ママ）	I think it does not matter whether it is in on-demand or hybrid class as long as the topics is interesting. Overall the class' topics were interesting and also increase my knowledge about Mie.
外国人 7	回答	③オンデマンド授業もハイブリッド授業も良い
	上の選択肢を選んだ理由（原文ママ）	I have no particular opinion. But I find it easier to watch a video than take a class on Zoom.
外国人 8	回答	③オンデマンド授業もハイブリッド授業も良い
	上の選択肢を選んだ理由（原文ママ）	今の特殊事態なので、全員が教室で授業を受けることが難しいです。でも、私は対面授業のほうが好きです。ハイブリッド授業はより便利だと思います。
外国人 9	回答	③オンデマンド授業もハイブリッド授業も良い
	上の選択肢を選んだ理由（原文ママ）	厳しい状況ですので、ネットで動画を見ても動画会議を見ても大丈夫だと思います。でも、授業の動画が開きにくい時もありますので、ビデオ会議がいいと思います。
外国人 10	回答	⑤全員がリアルタイムのオンライン授業を受けるのが良い
	上の選択肢を選んだ理由（原文ママ）	I prefer to have classes in zoom in real time. Sometimes (for example, this time) I missed the time to hand in my homework because I didn't watch the video given by the teacher in time. Because I feel very confused about which classes are over and which classes are not over yet during the final period. I'm very sorry. That's my mistake. But I think zoom can play a more supervisory role than watching video.
外国人 11	回答	⑤全員がリアルタイムのオンライン授業を受けるのが良い
	上の選択肢を選んだ理由（原文ママ）	Although this course is very good, I think the course in my mind is face-to-face class or face-to-face class on zoom. And I think all students take real-time online class on Zoom will have a better effect.

日本人 1	回答	①ハイブリッド授業よりもオンデマンド授業の方が良い
	上の選択肢を選んだ理由 (原文ママ)	オンラインだと授業に集中できないから。
日本人 2	回答	①ハイブリッド授業よりもオンデマンド授業の方が良い
	上の選択肢を選んだ理由 (原文ママ)	On Tuesday evening, I didn't have class, so I wanted to have many time when I could use free.
日本人 3	回答	①ハイブリッド授業よりもオンデマンド授業の方が良い
	上の選択肢を選んだ理由 (原文ママ)	効率がいいし、時間を有効的に使えるから。
日本人 4	回答	①ハイブリッド授業よりもオンデマンド授業の方が良い
	上の選択肢を選んだ理由 (原文ママ)	この授業だけに限らないが、オンデマンドだと先生が決まった時間に授業をしてくださるので濃い授業ができ、ハイブリッドの場合はどうしても質が落ちやすいため。
日本人 5	回答	①ハイブリッド授業よりもオンデマンド授業の方が良い
	上の選択肢を選んだ理由 (原文ママ)	Because it's more convenient to watch videos on demand at any time.
日本人 6	回答	①ハイブリッド授業よりもオンデマンド授業の方が良い
	上の選択肢を選んだ理由 (原文ママ)	楽です。
日本人 7	回答	①ハイブリッド授業よりもオンデマンド授業の方が良い
	上の選択肢を選んだ理由 (原文ママ)	Because it is easy to take class by on-demand, but I think hybrid class is good when students have to prepare for presentation or experience physically, for example, making Ise katagami .
日本人 8	回答	①ハイブリッド授業よりもオンデマンド授業の方が良い
	上の選択肢を選んだ理由 (原文ママ)	オンデマンドの方が時間があるときにゆっくり見れて楽だったから。
日本人 9	回答	①ハイブリッド授業よりもオンデマンド授業の方が良い ⑤全員がリアルタイムのオンライン授業を受けるのが良い
	上の選択肢を選んだ理由 (原文ママ)	ハイブリッド授業と言ってもほとんど対面に来ないためオンラインで済ませたほうが良いと思う。
日本人 10	回答	②オンデマンド授業よりもハイブリッド授業の方が良い ⑤全員がリアルタイムのオンライン授業を受けるのが良い
	上の選択肢を選んだ理由 (原文ママ)	できるだけ多くの人が教室で授業を受けられる環境でのほうが留学生も日本人も関係なくかかわりやすいと思うし、オンデマンドや zoom だと直接留学生の人たちと英語で話す機会が少なくなってしまうのでできれば対面で実践的に自分の英語力を身につけたいと感じたから。

日本人 11	回答	②オンデマンド授業よりもハイブリッド授業の方が良い ⑤全員がリアルタイムのオンライン授業を受けるのが良い
	上の選択肢を選んだ理由（原文ママ）	I think it's better to have the feeling that you're taking classes with someone.
日本人 12	回答	②オンデマンド授業よりもハイブリッド授業の方が良い ⑤全員がリアルタイムのオンライン授業を受けるのが良い ⑥コロナ禍でも、全員が教室で授業を受けるのが良い
	上の選択肢を選んだ理由（原文ママ）	オンデマンド<zoom オンライン<ハイブリッド<全員教室 の順に意欲や面白さ、楽しさがあると思うから。
日本人 13	回答	③オンデマンド授業もハイブリッド授業も良い
	上の選択肢を選んだ理由（原文ママ）	動画を何度も見返せるのがとても良かった。
日本人 14	回答	③オンデマンド授業もハイブリッド授業も良い
	上の選択肢を選んだ理由（原文ママ）	When the on-demand classes continued, there were times when they were boring.
日本人 15	回答	③オンデマンド授業もハイブリッド授業も良い
	上の選択肢を選んだ理由（原文ママ）	オンデマンドだと好きな時間に見ることができて、自分の予定に合わせられるのがありがたかったです。ただ、他のクラスメイトとも交流できるという点ではハイブリッド授業がいいと思いました。本当は全員が教室で一緒に受けられたら楽しいと思いますが、コロナ禍でそれは難しいと思うので、ハイブリッド授業で少人数だけでも直接会えると嬉しいです。
日本人 16	回答	③オンデマンド授業もハイブリッド授業も良い
	上の選択肢を選んだ理由（原文ママ）	Both are good.
日本人 17	回答	③オンデマンド授業もハイブリッド授業も良い
	上の選択肢を選んだ理由（原文ママ）	どちらでもあまり変わりはないと思ったからです。
日本人 18	回答	③オンデマンド授業もハイブリッド授業も良い
	上の選択肢を選んだ理由（原文ママ）	I couldn't take the face-to-face class after all, but I was satisfied.
日本人 19	回答	⑤全員がリアルタイムのオンライン授業を受けるのが良い
	上の選択肢を選んだ理由（原文ママ）	オンデマンドだと、授業時間に見ずに後回しにしてしまいがちだから。

実践報告

三重大学ベトナムフィールドスタディ 2020 の 実施と今後の展望

松岡知津子・奥田久春・Cao Le Dung Chi・Le Thi Hong Nga

Mie University Vietnam Field Study 2020 Performance and Future Prospects

MATSUOKA Chizuko, OKUDA Hisaharu, CAO Le Dung Chi, LE Thi Hong Nga

〈Abstract〉

This implementation report describes the implementation details of the "Mie University Vietnam Field Study", pursued by Mie University for many years, as it became a field study conducted online because of the COVID 19. While there are experiences that cannot be captured without visiting and interviewing in person, the before and after surveys of Mie University students and Ho Chi Minh City Pedagogical University students and the reports of Mie University students suggest that online communication does have some good aspects, such as nurturing in the Japanese students the awareness of the need to communicate to others in an easy manner to understand and the feeling of rediscovering the goodness of Japan.

キーワード：フィールドスタディ、オンライン交流、国際共修、新型コロナウイルス感染症

1. はじめに

これまで、三重大学とホーチミン市師範大学では三重大学生がホーチミン市師範大学を訪問し、学生同士で協働してフィールド調査を行うという「三重大学ベトナムフィールドスタディ（以下、VFS と呼ぶ）」を継続して行ってきた（吉井 2011、長縄 2015）。近年は、春期休暇中の 2 月末から 3 月中旬ごろまでに 1 週間～10 日程度行うことが多かったが、2019 年度は新型コロナウイルス感染症の拡大により、直前になって訪問中止を余儀なくされた。2020 年度に入っても、学生募集の段階では状況ははっきりと見えておらず、現地を訪問して行う形の交流が叶うかどうかは未知数であった。最終的には、状況は好転することなく、訪問は断念することとなった。しかし、前年度とは異なり、訪問中止となる可能性も視野に入れていたことから、2020 年度は、zoom によるオンライン交流に切り替えることとした。それに伴い、期間を 5 日間と短縮して交流の方法や内容を調整した上で交流活動を行った。参加者は、三重大学生が 4 名で、ホーチミン市師範大学生が 9 名の合計 13 名であった。

以下では、まず、本プログラムの目的と準備状況、実施概要について述べる。次に、事前および事後アンケートから参加学生たちの意識についてみていく。そして、今後、本プログラムをどのように展開していくことができるのかについて考えていきたい。

本プログラムの目的は、「協定大学であるホーチミン市師範大学での授業や学生交流、フィールドスタディ、ホームスティの経験を通して、グローバルな視点や国際感覚を持ちながら主体的に行動し、参加メンバーと協力しながら活動を進め、また異文化にあって積極的にコミュニケーションを図ろうとするグローバル人材に求められる能力・資質を育成する」としている。特に全ての活動がホーチミン市師範大学の学生とともに行う国際共修を特徴としている。国際共修とは、言語や文化背景の異なる学習者同士が意味ある交流 (meaningful interaction) を通して多様な考え方を共有・理解・受容し、自己を再解釈する中で新しい価値観を創造する学習体験である (米澤 2019)。ホーチミン市師範大学では、近年、ホーチミン市郊外やそれ以外の地域からの学生が増えてきており、ホーチミン市内から通う学生が減ってきたという事情から、ここ数年はホームスティは実施されていないが、その他の交流は活発に行われてきた。これまでの参加学生は、ベトナムを直接訪問していたことから、否が応でも「異文化に身を置く」状況が作られてきていた。すなわち、中心の活動であるフィールド調査以外にも、史跡訪問や現地での毎回の食事、天候といった全ての要素が異文化体験となっていたわけだが、オンラインでの実施となると、三重大学生は自宅の自室から参加することになり、それだけで異文化体験ができるということはなくなる。そこで、できるだけ限られた時間で様々な体験や国際共修ができるよう工夫する必要があると考えた。次節では、まず、どのように VFS 2020 の事前準備を進めていったかについて述べていく。

2. 事前準備

前節で述べた通り、2020 年度に実施した VFS 2020 では、当初現地への派遣も考慮に入れていた。2020 年 10 月 12 日に行ったオンラインによる事前説明会の段階では、派遣の可能性のあることを伝えており、参加者は 30 名程度と、関心の高さがうかがえた。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の状況は悪化していき、最終的には 4 名の参加者にとどまった。

以下では、オンラインによる VFS 2020 に向けた事前研修会について簡単にまとめる。これらの研修会はすべて zoom で行った。

表1 VFS 2020 の事前研修会

	日時	事前研修会の内容
第1回	11月25日(水) 12:10~12:50	参加者自己紹介、概要説明およびプログラムの確認、VFS 2020 の日程調整、日本文化紹介のテーマに関する説明、JASSO 奨学金の説明、海外渡航に関する説明、以降の事前研修会の日程調整、事前学習に関する分担決定(歴史、農業・気候、生活風習・食文化)、フィールド調査の大まかなテーマ決定(「農業」「教育」)
第2回	12月7日(月) 12:10~12:50	コミュニケーションで日本語がうまく通じない場合の注意点についての講義(教員作成のビデオ教材)、ベトナム語学習①(自己紹介)
第3回	12月21日(月) 12:10~12:50	ベトナム語学習②(声調、発音、数字等)、日本文化紹介に関するテーマの検討、学生による「ベトナムの歴史」の発表、新型コロナウイルス感染症拡大により、渡航中止の発表
第4回	1月7日(月) 12:10~12:50	ベトナム語学習③(タクシーの乗り方、道の尋ね方、レストランでの注文方法、ベトナムの食べ物)、学生による「ベトナムの農業」についての発表、オンラインでVFS 2020 を開催する旨の報告と参加意志確認
第5回	1月18日(月) 12:10~12:50	学生による「ベトナムの生活風習・食文化」についての発表、開講式、閉講式の司会等の役割決め
第6回	2月10日(水) 12:10~12:50	オンラインによるVFS 2020 のプログラム(案)の内容・日程確認、オンライン交流に関する疑問や不安な点などへの対応
第7回	2月17日(水) 12:10~12:50	ホーチミン市師範大学の概要、過去のVFSの報告書からどのような学生交流が可能か、フィールド調査についての話し合いの進め方の説明および相談
第8回	3月3日(水) 12:10~12:50	最終日程の確認、VFS 2020 の準備方法の相談

過去のVFS、すなわちコロナ禍以前には、ある程度まとまって時間が確保できる夕方に集中して5回程度行っていたが、今回は学生の都合等も考慮し、昼休みを利用して行うこととした。また、表1からも分かる通り、第3回の研修会が始まる前の12月中旬ごろまでは、渡航できる可能性が残されており、それを前提に準備を進めていた。しかし、状況が好転しないことから、オンライン交流に切り替え、第4回事前研修会にはオンライン交流に対する学生の意思確認を行った。

3. 「VFS 2020」の概要

本節では、オンラインによるVFS 2020のそれぞれの活動についてみていく。表2を参照されたい。

表 2 三重大学 VFS 2020 の主なスケジュール

		日程・時間	内容
1 日目	3 月 8 日 (月)	14:00～14:30 15:00～17:00	開講式 フィールド調査
2 日目	3 月 9 日 (火)	14:00～14:30 15:00～17:00	日本語・ベトナム語の教え合い① フィールド調査
3 日目	3 月 10 日 (水)	14:00～14:30 15:00～17:00	日本語・ベトナム語の教え合い② フィールド調査
4 日目	3 月 11 日 (木)	14:00～14:30 15:00～17:00	大学生活についての意見交換 フィールド調査
5 日目	3 月 12 日 (金)	11:00～13:30	三重大学生による日本文化紹介 最終発表会 (15 分+10 分質疑応答)、修了式

主な活動は、(1) フィールド調査、(2) 日本語・ベトナム語の教え合いおよび意見交換 (3) 日本文化紹介であった。(1) および (2) については、三重大学生とホーチミン師範大学生でそれぞれグループを決め、zoom のブレイクアウト機能を用いてグループごとに活動した。三重大学教員がホストとなり、一度全体で集まったあと、各グループに分かれた。インターネット環境等の事情により、途切れてしまった場合に備えて、教員はコンピューターの前で常に待機していた。(3) については、三重大学生があらかじめ準備しておいた発表を PPT 形式で行った。これら以外の活動にも、(4) 両学学生たちの昼食の様子や住環境紹介、ホーチミン市師範大学生による歌の披露なども随時行われた。以下では、各項目について、さらに詳しく見ていこう。

3. 1 フィールド調査

今回の参加者は 4 名であり、大きく「農業」と「教育」の 2 グループに分かれてフィールド調査を行った。過去の VFS では、医療や農業、教育などについて現地調査することが多かった。しかし、今回はオンラインによる調査であることから、あるテーマについて日本とベトナムの比較をするよう、初めから設定した。三重大学生 2 名とホーチミン市師範大学生 4 名または 5 名で 1 つのグループを作り、1 日目に初めて顔合わせをした。この活動が、本プログラムの中で最も時間をかけて行った部分である。5 日間で、テーマを絞るところから発表の分担を決めるところまでのすべてを行ったわけであるが、ある時は VFS の時間以外にもやり取りをしながら作業を進めたとのことであった。また、過去の VFS は現地に泊まり込みで実施しており、夕方以降も学生同士の調整が可能であったが、今回はオンラインということもあり、時間も限られていたため、進捗状況を報告し、翌日

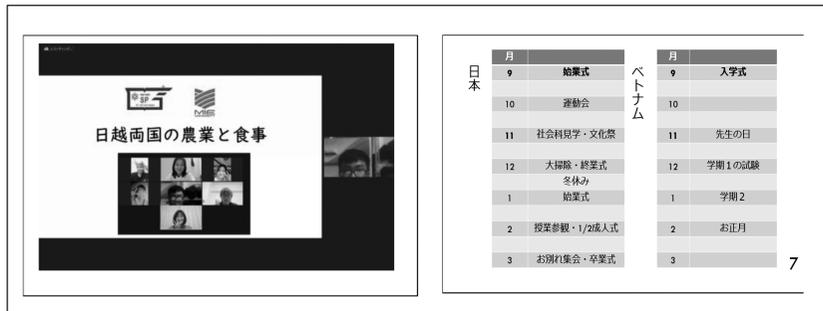


図1「農業グループ」と「教育グループ」の発表の様子

どのように進めていくかなどを随時報告してもらったこととした。

学生同士の通信環境は必ずしも良かったとは言えず、何度も接続が切れてしまうなど、コミュニケーション上の問題が少なくなかった。ホーチミン市師範大学生にとっては外国語となる日本語でコミュニケーションをすることになるわけであるが、通信環境の問題等から、対面で行うよりもずっと難しい状況であった。しかし、5節で述べる通り、お互いにチャット機能を用いたり、ホーチミン市師範大学生が理解しやすいよう、分かりやすい表現を使うように意識したりするなど、いかにして相手に伝えていくかということを学んだというコメントが多かった。これは、過去のVFSの報告書にはあまり見られないものである。これまでは、ホーチミン市師範大学生が熱心に日本語で交流してくれたことへの感動や感謝の言葉が多かったが、今回は、三重大学生自らが工夫していたとのことであった。

3. 2 日本語・ベトナム語の教え合いおよび大学生活についての意見交換

日本語・ベトナム語の教え合いおよびディスカッションは、zoomのブレイクアウト機能を使用して、上記調査とは異なる小グループを毎回作成し、行った。初回は自己紹介も兼ねて「日本語とベトナム語の挨拶」を行った。三重大学生は、事前に三重大学に在籍するベトナム人留学生から3回のベトナム語講座（いずれもオンライン）を受けており、簡単な挨拶程度は学んでいた。ホーチミン市師範大学の学生は、1年生から3年生までの日本語専門の学生たちであり、レベルの差こそあるが、皆日本語が話せる。翌日は、前日とは異なるグループを作成し、「日本語とベトナム語のことわざとオノマトペ」についてそれぞれ紹介した。そして4日目の大学生活についての意見交換では、学生同士の交流が進んでおり、打ち解けてきたことを踏まえて、「大学生のアルバイト」について、両国の状況を紹介し合ったり意見を述べ合ったりした。

これまでのベトナムフィールドスタディでは、フィールド調査の合間に共に食事をした

りするうちに自然と互いについて学び合い、意見交換する場が作られていたのだが、オンラインでフィールド調査を行うことになると、そのような時間が確保できないと考えた。また、フィールド調査のグループのメンバー以外とも交流できる場を設ける目的で、このような時間を設けることとした。

3. 3 日本文化紹介

日本文化紹介の活動は、過去の VFS でも行ってきた。VFS 2020 では、三重大学生がそれぞれ事前に準備した PPT 資料を画面共有しながら、全体で行った。テーマは三重大学生が各自選んだものであり、「日本のだし」「和菓子」「年中行事」「三重の方言」であった。この文化紹介は、ホーチミン市師範大学生のために作成したものであるが、5 節でも述べる通り、三重大学生自身にとっても日本について改めて考え直すきっかけとなったようである。

3. 4 その他の活動

ベトナムを訪問していれば自然と目にしたり体験したりすることになった食事や住環境について、疑似体験ができるよう、フィールド調査の合間等にお互いの食事や住んでいる地域の写真等を共有するようにした。また、修了式では、ホーチミン市師範大学生による歌の披露も行われた。三重大学生からは、学生の出身地をスライドで紹介した。インターネット接続の問題により、うまく音楽が流れないなどのトラブルもあったが、それまでの 4 日間で学生同士の交流が深まっていることもあり、温かいムードの中行うことができた。修了式には、プログラム参加者以外にも、ホーチミン市師範大学教員やプログラム参加以外の学生、三重大学教職員など 70 名近くが参加した。そして最後に、三重大学国際交流センター長（当時）からそれぞれの学生に修了証が授与され、ホーチミン市師範大学日本語学部長と三重大学国際交流センター長（同）の挨拶でしめくくられた。

4. アンケート調査の結果

本プログラムを実施するにあたり、三重大学生には事前と事後に、ホーチミン市師範大学生には事後にアンケート調査を行った。ホーチミン市師範大学生に事前アンケートが実施できなかった理由は、新型コロナウイルス感染症によってホーチミン市師範大学生の学生募集が困難だったからである。そのため、例えば、大学から参加するのか、故郷から参加するのかなど、どのような形でオンライン交流ができるかについて、手探り状態であった。そこで、ホーチミン市師範大学生向けの事後アンケートには、三重大学生に行った事前アンケー

トの質問も取り入れるなど、できるだけ両学学生に同じ項目について聞けるようにした。以下では、4.1 で三重大学生に対するアンケート結果を、4.2 でホーチミン市師範大学生に対するアンケート結果を見ていく。

4. 1 三重大学生に対するアンケート調査の結果

ベトナム訪問中止がとなり、オンライン交流が決定した時点で、まず事前アンケートを実施した。質問は全部で5問であり、Moodle 3.5 を使用して行った。回答に字数制限等は設けず、自由に記述してもらうこととした。事前アンケートの質問項目は以下の通りである。

表3 三重大学生に実施した事前アンケート

質問	質問内容
1	実際にベトナムに行かなくても学ぶことができると思うことは何ですか。どうしてですか。
2	実際にベトナムに行かなければ学ぶことができないと思うことはなんですか。どうしてですか。
3	対面で交流できないことを踏まえて、どのような交流が可能だと思いますか。
4	対面で交流できないことを踏まえて、どんなことに気を付けたいと考えていますか。
5	そのほか、今回のプログラムに期待することがあれば書いてください。

上記の質問について、紙幅の都合から、質問1~4について簡単に取り上げることとする。まず、質問1については、「ベトナムの言葉や歴史などの文字のみ、音声のみでもある程度理解できるもの」や「ベトナムの印象など」、「ベトナムの学生がどのようにオンラインで物事を進めていくのか」「ベトナムの農産物、輸出入品」などの回答があった。質問2については、「ベトナムの国の文化や暮らし」「その国の文化、習慣や人々の物事の捉え方など」「その国の雰囲気や観光地など」「食生活」などの回答が見られた。これらの質問をしたのは、オンラインで交流するにあたり、オンラインでできること、できないことを事前に自分なりに意識してもらいたかったからである。これらの質問を踏まえ、質問3ではオンラインでどのような交流が可能かについて問うた。それについては「動画やスライドを効果的に使う」「映像に撮って見せあう」「zoomの共有機能を用いる」「ビデオ通話などで実際の生活の様子を見せる」といった回答があった。続いて、質問4では、オンライン交流の注意点についての考えを述べてもらったところ、「画面が小さく、表情が見づらいために間違っ理解する可能性があるため、要所要所で確認を取りたい」「なるべく相手の性格や言動に気を付け、相手に配慮した言動を心がけたい」「オンラインでうま

く会話がかみ合わないこともあると思うので、話し方や反応はしっかり意識したい」「言葉が通じにくいことが多くなると思うので、丁寧に会話したい」といった、相手に配慮したいという回答が多くみられた。事前にこのような質問をすることで、三重大学生の意識を知ることができたと同時に、自分たちなりに、オンライン交流でどのようなことが可能かあらかじめ考えておいてもらうこともできたのではないかと考える。

次に、事後アンケートを見てみよう。事後アンケートでは、以下のような質問をした。

表 4 三重大学生に実施した事後アンケート

質問	質問内容
1	プログラムに参加してみて、参加前の不安や期待はあなたの予想と同じでしたか。
2	対面で交流できませんでしたが、どのような交流が可能でしたか。
3	対面で交流できなかったことを踏まえて、どんなことに気を付けましたか。
4	今回のプログラムで特に印象に残っている活動は何ですか。どうしてですか。
5	プログラムの中で、難しかったことはどんなことですか。そのとき、どのように対処しましたか。

質問 1 については、オンライン交流について、通信状況の悪さ等から「コミュニケーションがとりづらいことがあった」という回答があったが、コミュニケーションそのものについては、ホーチミン市師範大学生の日本語力が高く、問題なかったと答えた人が多かった。続いて、質問 2 については、「映像とテキストを併用した交流」「言語を教え合う交流」といった回答があり、現地を訪問することには及ばずとも、オンラインでもある程度の交流が可能であると考える人が多かった。また、質問 3 については、オンラインで言葉や言いたいことが伝わりにくい状況を克服するために、ホーチミン市師範大学に対して「少しオーバー気味にリアクションを取り、小さい画面でも意思疎通を取りやすいようにした」、「言葉をとてども簡単にゆっくりと話すようにした」といった、表現に気を遣ったという回答があった。質問 4 については、「ことわざを教え合う時間」「フィールド調査」「最終発表会」と様々であった。質問 5 については、通信状況の難しさ以外に、「フィールド調査の発表の仕方をどのように組んでいくかを定めること」、「自分の伝えたいイメージを正しく伝えること」といった回答があった。

これらの回答は、当然のことながら、実際にベトナムを訪問していたら全く違ったものになっていたと考えられる。これまでの VFS では、現地で直接体験することが強く印象に残るためか、コミュニケーションそのものについては、ホーチミン市師範大学生の日本語力に対する感動の方が大きく、たとえ工夫や苦勞していたとしても、印象に残っていな

いようであった。しかし、今回は現地での体験がないため、よりコミュニケーションそのものに焦点が当たりやすかったと考えられる。

4. 2 ホーチミン市師範大学生に対するアンケート結果

前述した通り、ホーチミン市師範大学生には事前アンケートを実施することができなかったため、事後アンケートのみを実施した。ただし、三重大学生に対して実施した事前アンケートの内容も含めるようにし、プログラム参加前と参加後の違いについても書いてもらうことにした。質問はすべて日本語で行ったが、回答は日本語でもベトナム語でもよいこととした。アンケートは、Eメールで送付し、記入後、メールで返信してもらった。

質問2については、オンラインという形式への不安の他、日本人と初めて交流すること

表5 ホーチミン市師範大学生に実施した事後アンケート内容

質問	質問内容
1	あなたはこのプログラムに何日間参加しましたか。1つ選んで○を付けてください。 3日間 () 5日間 ()
2	プログラムに参加する前、どんな不安・心配なことがありましたか。
3	プログラムに参加する前、どんなことを期待していました(楽しみにしていました)か。
4	プログラムに参加してみて、参加前の不安や期待はどのくらいあなたの予想と同じでしたか。
5	対面で交流するのとオンラインで交流するのはどんな点が違うと思いますか。
6	対面で交流できませんでしたが、どのような交流が可能でしたか。
7	対面で交流できなかったことを踏まえて、どんなことに気を付けましたか。
8	今回のプログラムで、特に印象に残っている活動は何ですか。どうしてですか。 () ベトナム語と日本語の教え合い、意見交換(両言語の挨拶や自己紹介、ことわざ、オノマトペ、大学生のバイトについて) () 日本とベトナムの食べ物や生活の紹介 () 日本文化紹介(今回のテーマ:日本のだし、和菓子、年中行事、方言) () 日本やベトナムの歌などの紹介(今回のプログラムの最後に両大学が発表したものです)
9	プログラムの中で、難しかったことはどんなことですか。その時どのように対処しましたか。
10	このプログラムに参加して、どのようなことを学びましたか。どんなことでもいいので、具体的に書いてください。
11	自分や参加者全体のオンラインの環境はどうでしたか。オンラインの環境がコミュニケーションにどんな影響を与えましたか。
12	その他、今回のプログラムについて感じたこと、考えたことを書いてください。

への不安、自分の日本語力が不足することによって起こりうる誤解や理解力に対する不安、テーマの難しさに対する不安などが挙げられた。次に質問 3 については、「日本語の練習」「日本事情について理解できる」といった日本に対する理解への期待の他、「自分の国について日本の学生に紹介したい」と考えていた人がいた。また、日本人の友達を作れることを期待している学生もいた。続いて質問 4 の参加前と参加後の意識の違いについては、「ほぼ予想通り」と答えた人もいたが、大半が「不安が半分減った」、「優しく話してくれたので不安が解消された」と答えた。質問 5 の対面とオンライン交流の違いについては、「どちらもスムーズにできたのであまり違いがない」と答えた人もいれば、「オンラインでは対面のようにコミュニケーションができない」と答えた人、「対面のほうが良いが、オンラインでも交流できることが分かった」と答えた人もいた。質問 6 については、SNS などを用いた交流が可能であるという回答が最も多く、Vlog を用いた交流の可能性など具体的なアイデアを提案するものもあった。質問 7 については、「ゆっくり話すようにした」「わからないとき聞き返すようにした」「会話が長くように、クローズドクエスチョンにせず、オープンクエスチョンにした」などであった。これら話し方の工夫についての記述は、三重大学生のアンケートでも同様の回答が見られた。質問 8 については、「ベトナム語と日本語の教え合い、意見交換」を選んだ人が最も多かった。これを選んだ理由については「日本とベトナムに同じ意味のことわざが多くあることを知った」「擬音語擬態語について勉強になった」「両国の大学生のアルバイトの体験をシェアできたので楽しかった」などの回答があった。フィールド調査とは異なるより身近なテーマについて話すことで、気軽に交流できたようであった。続いて質問 9 については、大半の回答が「インターネット環境」と「言語の壁」についてであった。インターネット環境が悪く、音声聞き取りにくい場合には、チャット機能などを駆使したこと、日本語が理解できない場合には三重大学生に繰り返してもらおうようお願いしたり、必要に応じて聞き飛ばしたりしたという回答があった。

質問 10 ではプログラムで学んだことについて聞いたが、「日本のことわざ」、「日本の方言」「ベトナムと日本の教育の違い」といった具体的な内容が挙げられた。4.1 で述べた三重大学生に行った事後アンケートの結果と比較すると、三重大学生はコミュニケーションの取り方に重点を置いていたのに対し、ホーチミン市師範大学生は具体的な学習内容について述べていたことが分かる。

5. VFS 2020 報告書に見る学生の気づき

これまで、事前アンケート及び事後アンケートの回答を見てきたが、本節では、三重大学生が作成した VFS 2020 報告書に見られる全体の感想を通して学生の気づきを見ていき、今後の VFS のあり方について考えていきたい。

ベトナム学生や私の接続状況が悪い場面が多々あり、会話が困難でした。また、日本語で上手く表現できない場合に、身振り手振りで表現しようとしても、なかなかオンラインの画面上でそれを表現することが困難である場合もあり苦労しました。しかし、全体的にベトナム学生の日本語能力の高さに驚き、通信環境等を考えなければ、会話（議論）をする上で特に支障はありませんでした。私が英語などの外国語で今回のような議論ができるかといわれれば、自信がないため、刺激をうけ、今後挑戦してみたいと思いました。

<中略>留学生と話している時も感じますが、それぞれの学生がそれぞれ自分自身の考えを持っており、自分が違うと思った場合には、「違うと思う」や「これはやりたくない」ということをはっきり伝えてくれることです。日本においては多少気に入らない部分があっても、妥協したり、同調したりと自分の意見をはっきり言わない場面もあり、私としてはとても刺激を受けました。（学生 A）

学生 A は、ホーチミン市師範大学生とのコミュニケーションを通して、驚きや刺激を受けたことを述べており、オンラインであっても影響があったことが分かる。

ベトナムフィールドスタディを通して、相手にわかりやすく言葉を伝えることの重要性を学んだ。ベトナムの人たちと話し合っていると、私たちの言葉が難しかったのか、ベトナムの人たち同士で話し合ってから返答があったことや、間違った伝わり方をしたことがあった。そのため、わかっていなさそうな雰囲気があれば、表現を変えて伝えるなどの工夫を行った。難しい言葉の羅列は自分の知性を象徴するものになることもあるが、それで言いたいことが相手に伝わらなければ本末転倒である。相手が理解できる単語を選んで伝えることが大切だと改めて感じた。

<中略>また、オンライン開催ということを残念に思ったが、利点もあると感じた。現地の空気を肌で感じるできない点やラグが発生する点がデメリットだが、お金をかけずに気軽にベトナム人と関わる点ができた点、日本の様子やベトナムの様子を見せあって、ベトナムの人たちに日本がどんなものか見せることもできた。気軽にお互いの文化の違いを知ることができる点がメリットだったと思う。

このベトナムフィールドスタディは、イレギュラーな点多かったが、その分臨機応変に対応するという力が身につく、オンラインという場面で工夫していく力も身についたと思う。（学生 B）

学生 B は、相手に理解してもらえらる工夫することや「臨機応変に対応する力」がオンライン交流でも身についたことに触れている。

<前略>私たちの「当たり前」と感じていることも他国の人から見たら、そうでないことも多くあることが分かった。

<中略>この 5 日間を通して多くのことを学ぶことができたと思う。もちろん、フィールド調査を通して日本とベトナムの教育の違いを知ることができたという点もあるが、それ以外にも、オンライン上でも国際交流ができること、日本の当り前は他国から見た時には当り前ではないことや、ベトナムの学生から現地の話聞くことでベトナムの魅力などが分かった。また改めて、自国である日本の魅力も感じることができた。開催前はオンライン上で開催されることに少なからず抵抗を感じていたが、参加したことで得ることができたものも多くあったので、参加できて良かったと思う。機会があれば、今回オンラインを通して交流したベトナムの学生と実際に会いたいと思う。(学生 C)

学生 C は、VFS を通して日本について見つめ直すことができたことなどオンライン交流について参加したことで得るものも多かったと述べている。

ベトナムフィールドスタディを行っていく中で日本人とベトナムの学生が受け取る言葉の感じ方の違いや、言葉の解釈の違いがベトナムの学生とパワーポイントを作っていく中で感じる事ができました。また、それ以外の部分でも日本とベトナムの文化の違いを知ることができました。相手に伝える力、相手を理解する力などが鍛わり、とてもいい経験ができました。

<中略>フィールドスタディを行っていくことで、相手の話をよく聞き理解しようとする力や、相手に理解をさせるために言葉をかみ砕いて分かりやすく説明する力のようなコミュニケーション力が鍛えられるとてもいい経験ができました。(学生 D)

学生 D もコミュニケーション力が鍛えられるよい経験となったことを述べている。

これらのように、オンラインで限られた交流とはなったものの、ホーチミン市師範大学と協働し、お互いの文化を伝えあい学び合うという国際共修を通じて学生一人一人がそれぞれに気づきや学びを得ており、自分のこととして捉えていることが分かる。

6. おわりに

本稿では、新型コロナウイルスの影響により、オンライン交流に切り替えて行った VFS 2020 の実践について、その準備とプログラムの概要、そして事前および事後アンケート、報告書の感想文に見られる学生の気づきや学びについてみてきた。実際に現地を訪問し、冬の寒い日本とは対照的な現地の熱気を感じつつ直接顔と顔を突き合わせて初めて得られる経験はもちろん貴重であるが、現地訪問が叶わない状況において、また通信環境の問題など限られた条件下で苦労することによってコミュニケーションの大変さと大切さを改め

て感じるなど、これまでにない経験ができたことは一つの大きな成果であるといえよう。現在、VFS 2021 の実施に向けて事前研修会を行っている最中であるが、前年に続きオンラインによる開催が決定している VFS 2021 では、VFS 2020 とは異なり、募集段階からオンライン交流であることを通知していたこともあり、参加者はここ数年で最多である 15 名に上る。VFS 2021 では、学生からのコメントを生かして、Vlog などで交流ができるよう三重大学生が三重県各所を訪問し、ビデオ等で紹介することにするなど改良を加えている。また、VFS 2020 では、スケジュールの決定が遅かったこともあり、プログラム 1 日目に初めて学生同士が顔合わせをすることになった。そのため、フィールド調査のテーマについてほとんどゼロの状態から開始することとなっていた。この点については、学生が事前アンケートでも不安に思っていたことが述べてあったが、VFS 2021 では、できるだけそのような不安を解消すべく、また有意義な議論ができるよう、事前に学生同士が連絡を取り合えるような仕組みを作っていくたい。

参考文献

- 1) 奥田久春・松岡知津子 (2020) 「2018 年度三重大学ベトナムフィールドスタディの意義と課題」『国際交流センター紀要』15, pp.81-94.
- 2) 奥田久春・松岡知津子 (2021) 「海外研修の知見を生かした国内での国際共修の可能性：三重大学ベトナムフィールドスタディを事例に」『三重大学高等教育研究』27, pp.85-88.
- 3) 長縄真吾・江原宏 (2015) 「ベトナムでの海外体験学習を通じた参加学生の意識変化—グローバル人材育成の観点からの一考察—」『三重大学国際交流センター紀要』10, pp.137-152.
- 4) 吉井美知子 (2011) 「参加型開発教育の実践と考察：三重大学ベトナムフィールドスタディツアーの事例より」『三重大学国際交流センター紀要』6, pp.65-79.
- 5) 米澤由香子 (2019) 「国際共修：開発と発展の背景」末松和子・秋葉裕子・米澤由香子編著『国際共修 文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂, pp.4-8.

日米大学生による英語と日本語の Virtual Exchange 型会話練習

正 路 真 一

Virtual Exchange Project of English-Japanese Conversation Practice by Japanese and American University Students

SHOJI Shinichi

〈Abstract〉

The present paper reports a Virtual Exchange activity conducted with students from two U.S. universities and three Japanese universities, including Mie University. The American students were enrolled in Japanese language classes in their schools and assigned to participate in this activity. The Japanese students were those who were interested in learning English, and their participations were voluntary. The students met on ZOOM as pairs and made conversations both in Japanese and in English in order for them to practice their target languages. Five students from Mie University participated in the online conversation meetings three times in October, November, and December. Post-activity questionnaires given to the five Mie University students indicated that they enjoyed the interactions with native English speakers, learned language-related knowledges, and motivated to participate in another exchange activities in future.

キーワード：Virtual Exchange、英語、日本語、語学

1. はじめに

2020年初頭に始まる日本でのコロナ禍の拡大以降、ICTの技術を用いたVirtual Exchange および COIL 型の国際教習が盛んに行われるようになった。こうしたオンラインでの交流活動が最も効果的である分野が外国語学習や異文化理解などを目的とした国際交流で、その有効性はコロナ禍以前より報告されている（池田 2016, 小玉 2018）。外国語習得の上では、その言語を母語として話す話者との交流が有効であることは異論のないところであると思われるが、そうした機会を得る手段としては海外留学やワーキングホリデーなどがあり、日本ではそうした「国外における国際化（Internationalization Abroad; IA）」が長く重視されてきた。一方、ICTの発展は、日本国内にしながら画面上で学習言語の母語話者と交流することを可能とし、これによる「国内における国際化（Internationalization at Home; IaH）」の取り組みがコロナ禍の時代に入って急速に拡大

している (池田 2021)。ただしオンライン交流活動などの IaH は、実際の海外留学などの IA と対立するものではない。IaH は海外に出ることができない学生のためのものであると同時に、海外留学に踏み切れない学生の背中を押すものでもあり、また海外留学を決心している学生の語学的・心理的なレディネスを涵養するものでもある (池田 2021)。

本稿は、上記 IaH に基づく取り組みとして、三重大学、山口東京理科大学、成城大学に所属する日本人学生とバージニア大学およびミネソタ大学に所属する米国の学生が、お互いの学習言語である英語と日本語で Zoom を通じて会話するという語学上の上達と慣れを目的とした交流活動を報告するものである。オンライン上での交流活動は Collaborative Online International Learning (COIL) がよく知られているが、厳密に言えば、COIL は Virtual Exchange (VE) と呼ばれる活動の一形態である。端的には (筆者の理解では)、ICT 技術を用いた遠隔交流は全て VE の範疇に入るが、二つ以上の高等教育機関のそれぞれの開講科目の受講者が、その科目において課された活動として交流するものを COIL と呼ぶ (国際教育研究コンソーシアム 2020)。また COIL 発祥の地であるニューヨーク州立大 (2019) の Faculty Guide for COIL Course Development (version 1.5) には、その冒頭の “What is COIL?” の項において “Our method links a class at a U.S. institution with one at a college or university abroad. Courses are co-equal and team-taught by educators who collaborate to develop a shared syllabus that emphasizes experiential and collaborative student-centered learning (筆者訳：この手法は米国大学の科目と国外大学の科目とを連携する。これらの科目はお互いの教育機関において対応するレベルにあり、また学期中に開講されているものである。それぞれの科目の教員が協力して、実体験および協働に基づく学生自身による学びに重きを置いたシラバスを作成する。)” と記されている。これらの説明に拠ると、本稿で報告する活動は、米国大学の学生にとっては科目内活動であるが日本の大学の学生にとっては科目内活動ではないため COIL には当たらない。日本からの参加者は特定の科目の受講者ではなく、自身の興味や学習意欲をもとに参加したものである。時として COIL と VE の境界線は曖昧であり、科目に縛られない活動をも COIL と呼ぶことがあるようであるが、そうした境界線の曖昧さが妥当であるかどうか筆者には判断がつかないので、本稿で報告する活動は、より厳格な定義に従って VE と呼ぶことにする。

2. VE 会話練習の取り組み

本稿で報告する VE の取り組みは英語学習に興味のある日本の大学生と日本語学習者である米国の大学生がオンライン上で英語と日本語の会話を練習するものであるが、これは

数年前から山陽小野田市立山口東京理科大学（以下山口東京理科大学）、成城大学、そして米国のバージニア大学、ミネソタ大学の間で実施されていたものであった。ただ近年米国側の参加学生の数が増えたことにより、筆者と旧知のバージニア大学の担当教員が本学の学生の参加を提案してきたものである。これにより、2021年度後期（米国においては秋学期）においては、日本側は山口東京理科大学、成城大学、三重大学の日本人学生が、そして米国側は従来通りバージニア大学とミネソタ大学の学生が参加して、VE 会話練習が実施された。

活動内容の概要としては、米国大学の学生と日本の大学生を含む2~4名のグループが、各グループ内でZoomを使って顔を合わせ、英語と日本語で会話をする。一回の会話時間は約40分で、20分間日本語、20分間英語で会話することになっているが、それぞれの学生の語学能力や話の盛り上がりによって、各回の会話時間や日英語使用の割合は、概ね学生たちに任されている。また、この取り組みは、本質的にはバージニア大学とミネソタ大学の日本語科目受講者への課題として実施されるものであるが、これらの米国大学生が受講する科目は複数種類あり、それぞれの科目に応じて課される会話練習の回数が異なる。具体的には、ある科目の受講生は3回の会話を、また別の科目の受講生は7回の会話を課される。そして日本側の参加学生は、自分のグループメンバーである米国人大学の受講科目に合わせて会話の回数が決まる。

参加学生の募集についてであるが、指定の日本語科目を受講している米国大学の学生には必須課題として課されるので、その科目を履修した米国大学生の数に合わせて日本人学生が募集される。今回（米国の2021年秋学期）、本取り組みに参加する米国大学生はバージニア大学から49名とミネソタ大学から28名の、合計77名であった。そして、77名の米国大学生のうち14名は3回、残りの63名は7回の会話練習を課された。またこの77名のうち、二人グループで会話練習に参加することを課された学生、または三人グループや四人グループでの参加を課された学生もいたので、その数に合わせた結果、46名の日本人学生が募集されることとなった。三重大学は今回が初参加ということもあり、5名の日本人学生を募集することとなった。そして成城大学からは1名、残りの40名を山口東京理科大学が募集した。ただし山口東京理科大学の40名のうち3名は当該大学の担当教員の既知の社会人、そして1名は教員となった。こうして、米国大学生の参加者に合わせて、日本側は46名の日本人学生（および社会人と教員）を揃えた。

前述の通り、三重大学はこのVE会話練習に今回初めて参加するものであり、どのくらいの参加希望学生が現れるか予測できなかった。そのため三重大学からは5名のみ募集、そしてその5名は3回だけの会話練習を課された米国大学生に割り当てられることとした。

筆者にとって今回の参加は、どの程度の数の三重大学生がこうしたオンライン国際交流に参加意欲を持って参加を申し出るか、また参加学生たちはこの会話練習に楽しんで取り組めたか、そして学生たちの学びとなったかなどを把握するためのもので、それにより今後継続して参加するかどうかを判断するためのトライアルであった。三重大学からの 5 名の参加学生の募集にあたっては、筆者が担当する本学国際交流センター開講科目(教養教育院開講科目)「三重の社会と文化(三重大学)」を受講したことのある日本人学生を対象とした。この科目は授業内言語が英語であり、また日本人学生と外国人留学生の両方が受講しており、日本人学生と外国人留学生の協働活動を取り入れていることから、英語母語話者との交流に積極的な学生が比較的多いと判断し、この科目の受講経験者から VE 会話練習への参加を募ることにした。ただし米国大学の秋学期は八月に開始され、米国側の受講者数(この VE 活動参加者数)が決定するのが履修修正期間を経た九月初頭になった。それを受けて、筆者は本学の夏休み中の九月上旬に、2021 年前期までの「三重の社会と文化」受講者を対象にメールを送って募集した。従って、前述の通り、日本人学生にとってはこの会話練習への参加は本学での受講科目の課題というわけではなく(つまり COIL ではなく)、あくまでもカリキュラム外の VE 活動である。募集メールは総計 41 名の三重大学性に送り、メールを送った翌日から翌々日にかけて 5 名の参加希望者から連絡があった。またその数日後さらに 1 名の学生から参加希望の連絡があったが、この学生はキャンセル待ちリストに入った。結局、募集メールを送付した 41 名中参加希望者が 6 名であったので、今回の募集人数を 5 名と設定したのは妥当であったと思われるが、今後も本学がこの VE 活動に参加するなら、募集人数を増やすかどうかについては検討を要する。計算上は、募集メールを送付する学生数を 80 名ほどに拡大すれば 10 名程度の参加を確保できると予想される。

本学の学生が VE 会話練習の相手として割り当てられたのは全てバージニア大学の学生で、全て日本人学生一人と米国大学生一人からなる二人グループであり、また(前述の通り)全て 3 回のみ会話練習を課された。その 3 回の会話練習の時期は、第一回目が 10 月 30 日～31 日の週末の中の 40 分、第二回目が 11 月 20 日～21 日の週末の中の 40 分、そして第三回目は 12 月 4 日～5 日の週末の中の 40 分とスケジュールされていた。その第一回目の前に、米国大学生からそれぞれの会話の相手となる日本人学生にメールが送られて、上記の週末のうちどの日の何時から会話を開始するかを学生どうして相談した。この段階において、本学学生の一人から筆者に「相手の米国大学生から、1 週間前になっても連絡が来ない」という問い合わせがあった。こちらは筆者がバージニア大学の担当教員に連絡し、相手の米国大学生に本学学生へのメール送付を促してもらって解決した。また別の一

人の本学学生から、「相手の米国大学生からメールが来たが、『じゃあこの時間でいいですか』と返信したところ、それに対する返事がない」という連絡があった。こちらも筆者からバージニア大学教員に問い合わせたところ、先方の学生が返事を忘れていたとのことだったので、返信を促し、解決した。こうして、5名全ての本学学生が、それぞれの相手の米国大学生と時間を決め、Zoom リンクを米国大学生が作成し、第一回目の会話に臨んだ。

第1回目の会話練習が行われた10月30日～31日の週末明けの月曜日に、筆者から三重大学の参加者5名に、無事会話練習を終えられたか確認するメールを送った。2名の参加者から無事終了との返信があり、1名からは週末ではなく月曜日にするようになったとの返信があり、残りの2名からは返信がなかった。前述の通りこれは授業の課題ではないので、筆者はこの2名に再度確認メールを送ることを控えた。また、2回目の会話練習と3回目の会話練習の間、11月29日にも、筆者から三重大学の参加者5名に、無事2回目の会話練習を終えられたか確認するメールを送った。1名の学生から無事終了されたという返信があったが、他の学生からは返信がなかった。12月7日に、筆者から三重大学の参加者5名に、3回目の会話練習を終えられたかを確認するメールを送ったが、2日以内に、5名の学生全員から無事終了されたという返信があった。

3. アンケート調査

会話練習に参加した三重大学生5名に、第1回目の練習の前に事前アンケートを、第3回目の練習の後に事後アンケートに回答してもらった。その結果をこの章に示す。

3.1 事前アンケート

第1回目の会話練習を開始する前週に実施した事前アンケートの質問と回答を下の表にまとめる。

表1 事前アンケートの質問と回答（原文ママ）

質問1：今のあなたの英語能力はどの程度ですか（例：TOEIC 645点、英検2級、GTEC 900点、など）。
学生 K.R. 何もありません。 学生 O.Y. TOEIC 795点 学生 K.Y. TOEIC 545点、英検二級、GTEC 900点台（詳細の点数は不明） 学生 M.H. TOEIC 805（IP試験） 学生 O.A. 英検2級
質問2：どうしてこの会話練習に参加しようと思いましたか。
学生 K.R. 外国の方と話す機会がほしいと思っていたから。 学生 O.Y. 先生に勧められて面白そうだったから。

<p>学生 K.Y. 自分の英語能力を高めるため。 学生 M.H. 英会話に興味があったから。 学生 O.A. 留学を目的とした海外渡航もできない今、英語を話す人と関わることでできるいい機会だから。</p>
<p>質問 3: 会話練習に参加することで何を期待していますか。</p>
<p>学生 K.R. 自分の英語力がどこまで通用するのかを知る。 学生 O.Y. 特に日本では学ぶ機会が少ない海外の文化を知りたい。 学生 K.Y. 英語能力を高めること、海外の友達ができること、英会話を通して自分の視野を広げること。 学生 M.H. リスニング力とスピーキング力の向上。 学生 O.A. 自然な流れで英語で会話ができるようになること。国際的な友人関係をつくりたい。</p>
<p>質問 4: 会話練習をするにあたって不安なことはありますか。</p>
<p>学生 K.R. インターネット環境のせいで会話ができないこと。 学生 O.Y. 特にないです。 学生 K.Y. 英語で喋ることに慣れることに時間がかかるかもしれないということ、言葉に詰まるかもしれないということ (でもそのうち何とかなるだろうと思っていてそれほど不安ではないです)。 学生 M.H. 自分の英語力。 学生 O.A. 特にありません。</p>
<p>質問 5: その他コメントがあれば書いてください。</p>
<p>学生 K.R. (無回答) 学生 O.Y. いい機会を用意してくれてありがとうございます。 学生 K.Y. 貴重な機会なので楽しんで有意義に会話練習に取り組みたいと思います。 学生 M.H. (無回答) 学生 O.A. (無回答)</p>

質問 1 は参加学生の英語能力を調べたものであるが、この VE 活動への参加にあたっては特に英語能力を基準として参加の許可を与えたわけではない。学生 TOEIC 795 点の O.Y. と TOEIC IP テスト 805 点の M.H. は、大学生 (学部生) としては平均を大きく上回る英語能力を有していると考えられる (TOEIC の大学生平均スコアは 574 点、TOEIC IP テストの平均スコアは 455 点; IIBC, 2020)。また「何もありません」と回答した学生 K.R. と、英検 2 級を取得している学生 O.A. の回答からは、彼らの英語能力が特に大学生として優れたものであるとは判断できない。しかし、学生 O.A. の回答に書かれた「英検 2 級」が、いつ取得したものか確認しなかったこともあり、現時点での K.R. と O.A. の英語能力は不明であった。また、学生 K.Y. は GTEC 900 点以上と回答したが、どの種類の GTEC を受験したのかを確認しなかったため、こちらも現在の英語能力は不明であった。質問 2、質問 3 からは、これらの学生が英語能力を高めることを目的として、あるいは海外の文化を知ること、海外の友人を作ること、そして自身の視野を広げることを目的とし

てこの VE 会話練習に参加したことが示されている。また質問 4 では、今回の VE 活動参加にあたって、自身の英語能力が米国大学生と会話するに十分なものであるかという心配、またインターネット環境に関する心配が挙げられた。質問 5 に対する回答からは、特に注目すべきものはなかった。

3.2 事後アンケート

第 3 回目の会話練習が終わった次の週に実施した事後アンケートの質問と結果を下に示す。質問が多いので、表 2 と表 3 に分けて記すが、表 2 は主に VE 会話練習の実際の実施過程について聞いたもの、表 3 は振り返りの質問である。

表 2 事後アンケートの質問と結果：会話の過程（原文ママ）

質問 1：会話練習の時間を決めたり、当日オンライン上で会ったりするのはスムーズにできましたか。
学生 K.R. できました。 学生 O.Y. できました。相手の方から連絡をくれる事が多く、空いている日程をいくつか提案してくれたので、二人の都合があう日程を決めることができました。 学生 K.Y. 滞りなくできました。 学生 M.H. はい。 学生 O.A. 一度私側の音声聞こえないことがあったが、それ以外はうまく行きました。
質問 2：会話練習中の相手の態度はどうでしたか（例：好感が持てた、積極的だった、つまらなさそうだった、など）。
学生 K.R. 積極的に話してくれた。 学生 O.Y. お相手は日本に興味があり私はアメリカの文化に興味があったのでお相手の態度に関してはとても好印象でした。 学生 K.Y. 会話しようという説教的な姿勢が伝わってきて自分も意欲が増した。 学生 M.H. とても楽しそうだったと思います。 学生 O.A. 会話が途切れた時でも質問をいってくれたりしてくれ積極的な印象を持てた。
質問 3：英語での会話はスムーズにできましたか。
学生 K.R. できたと思う。 学生 O.Y. できました！わからないことはすぐに聞くのが一番だと思いました。そうすることでスムーズに会話を続け、楽しむ事ができました。 学生 K.Y. 日本語から英語に切り替えるときに英語が出てこないことがありやや苦勞したが、時間が解決した。 学生 M.H. まぁまぁ。 学生 O.A. 時々伝わらないこともあったが、違う表現で伝えようと努力できた。
質問 4：日本語での会話はスムーズにできましたか。
学生 K.R. できました。 学生 O.Y. できました！あらかじめメールでテーマを決めていたのでテーマを決めるのに時間をかけることがなくてよかったです。

学生 K.Y. 相手の日本語がとても聞き取りやすかったのでスムーズだった。

学生 M.H. はい。

学生 O.A. 相手はかなり日本語が話せたのであまり困ることはなかった。

質問 5：英語での会話で、何の話題を話したか、思い出せる限り書いてください。また、特などの話題が一番盛り上がりましたか。

学生 K.R. お正月に何を食べるかという話題。

学生 O.Y. 特に文化について話しました。(クリスマスに何をやるかなど、)特に盛り上がった話題は、お互いの国に旅行するならどこがお勧めかを教えてくれた事です。アメリカに住んでいるケビンさんならではのアドバイスが聞いて面白かったです。

学生 K.Y. アメリカの音楽の流行り、部活やスポーツはしていたか、アメリカのスラングについて、好きな音楽アーティスト、好物は初めに食べるか最後に食べるか、今日は何をしていたか、お互いのペットについて、アウトドア派かインドア派か、ごはんとパンはどちらが好きか、好きな授業はなにか、大学の食堂について。

学生 M.H. 大学での生活、アルバイト。

学生 O.A. 今週末の予定やしたこと、シェアハウスの様子・困ること、アルバイト、感謝祭などの国の祝日の違い、ブラックフライデーで買ったもの、大学、お寿司、インターンシップ、就職、話せる・学んでいる言語。特に盛り上がったのはインターンシップ、就職のことだと思う。

質問 6：日本語での会話で、何の話題を話したか、思い出せる限り書いてください。また、特などの話題が一番盛り上がりましたか。

学生 K.R. 日本とアメリカの違い。(桜と栗の話)

学生 O.Y. こちらも文化について話す事が多かったです。上の質問の答えと似ていますが、お互いの国に行くならどうというプランでいくかを話し合ったことが印象的でした。(1 日目は東京に行って、2 つかめは大阪で…など)

学生 K.Y. アメリカは今寒いのか、雪は降っているか。相手の両親が中国の方だったので、中国について。アメリカでおすすめの場所。アメリカに行ったらどこに行きたいか、人が話しているときに相槌を打つことは失礼なのか、休日には何をやるか、日本に来たことはあるか、アメリカには日本のような大学入学試験がないこと、アメリカの大学 1 年生はアルバイトをする暇がないこと。

学生 M.H. アニメ、好きな俳優。

学生 O.A. 今週末の予定やしたこと、シェアハウスの様子・困ること、アルバイト、感謝祭などの国の祝日の違い、ブラックフライデーで買ったもの、大学、お寿司、インターンシップ、就職、話せる・学んでいる言語、学校制度。お寿司の話が一番盛り上がったと思う。

質問 7：一回の会話練習で、平均して英語と日本語での会話時間の割合はどうでしたか (例：英語 35 分、日本語 25 分くらいなど)。

学生 K.R. 日本語 20 分、英語 20 分。

学生 O.Y. 英語 35 分、日本語 30 分。

学生 K.Y. 時間を計ってちょうど半分ずつ会話しました。(筆者注：日本語 20 分、英語 20 分と思われる)

学生 M.H. 分けずに混ぜて話してしまったので、具体的時間がわかりません。

学生 O.A. 1 回目はほとんど日本語（60 分ぐらい）／2 回目英語（30 分）日本語（45 分）／3 回目日本語（40 分ぐらい）英語（20 分ぐらい）

質問 8：自分の英語と相手の日本語では、どちらの方がレベルが高いと感じましたか。

学生 K.R. 相手の日本語。

学生 O.Y. 単語の語彙についてだと私の方がわからなかった単語の数は少なかったと思います。

学生 K.Y. 相手の日本語。

学生 M.H. 相手。

学生 O.A. 相手の日本語。

質問 1 の結果から、ZOOM で会う時間の取り決めやソフトウェアやハードウェアに関するテクニカルな問題は特段なく、概ねスムーズに実施できたと考えられる。質問 2、質問 4、そして質問 8 の結果から、会話の相手の米国大学生が積極的な態度で会話に臨み、また日本語のレベルが高かったので、日本語での会話がスムーズに進んだと推察できる。一方質問 3、質問 8 の結果から、三重大大学の参加学生の中には、英語での会話にはやや苦戦した学生もいたようである（学生 K.Y.、学生 O.A.）。ただし質問 7 から分かるように、特に会話時間の長さが日本語に偏ったということはない。また会話時間は日本語と英語を合わせて約 40 分と定められていたが、それより長く会話をした学生が二人いた（学生 O.Y.、学生 O.A.）。また、質問 5、質問 6 からは、英語でも日本語でも、会話の話題が多岐にわたっていたことが窺える。

次に、前述の通り、表 3 に会話練習全体の振り返りに関する質問と回答の結果をまとめる。

表 3 事後アンケートの質問と結果：振り返り（原文ママ）

質問 9：全体的に振り返って、楽しめましたか。

学生 K.R. 楽しめました。

学生 O.Y. とても楽しめました。

学生 K.Y. 楽しめました。

学生 M.H. はい。

学生 O.A. 最期の会話練習の時に連絡先の交換と連絡を取り合う提案をした。とても楽しめ、また同じようなプログラムがあれば参加したいと思う。

質問 10：全体的に振り返って、自分の英語力向上に役に立ったと思いませんか。もし思ったなら、どのような点について役に立ったと思いますか（例：語彙力、発音、心理的に英語ネイティブ話者と話すことに慣れた、など）。

学生 K.R. ネイティブと話すことになれた。

学生 O.Y. 英会話の向上には場数を踏むことが欠かせないということを聞いたので今回参加させていただきましたが、それ以前に会話自体を楽しむ事ができた経験がよかったです。また、お互い言語を勉強している途中なので失敗を恐れずに話すことができたので、語彙の向上というよりは、会話の楽しさを改めて実感することができました。

<p>学生 K.Y. 発音、聞き取り、今後の意欲につながる、など。 学生 M.H. はい。英語での表現の仕方を学んだ。 学生 O.A. 役だったと思う。たとえ伝わらなくても、焦らず他の表現と翻訳の機器を用いながら伝えることができた。また、私自身がわからないときにももう一度聞いてみることもできた。ネイティブと話す時に緊張してしまうが自分の意見を伝えよう、文法が間違っても伝えてみようと思うようになった。</p>
<p>質問 11：全体的に振り返って、参加前に自分が期待していたことが満たされたと思いますか。</p>
<p>学生 K.R. もう少し英語で話したかった。 学生 O.Y. (無回答) 学生 K.Y. おおむね満たされた。 学生 M.H. はい。 学生 O.A. 自分の友だちの幅を広げ、インターナショナルな環境、学習機会、出会いをしたいと思っていたのでとてもよかったです。</p>
<p>質問 12：全体的に振り返って、参加前に自分が不安に思っていたことが的中してしまったと思いますか。</p>
<p>学生 K.R. いいえ。 学生 O.Y. (無回答) 学生 K.Y. 思わない。 学生 M.H. いいえ。 学生 O.A. 第一回目は大成功とは言えなかったが、回数を重ねていったことで不安は消えた。</p>
<p>質問 13：今後このような取り組みをするにあたって、参加学生や企画者(教員)が注意しておくべきと思う点がありましたか。</p>
<p>学生 K.R. 時間が限られているので全力で楽しむこと。 学生 O.Y. とても楽しくてためになるプログラムに参加させていただき本当に感謝します。トークの内容は生徒たちに任せてもいいとは思いますが、万が一生徒同士のコミュニケーションがうまく取れず、トークテーマが決まらないということを想定して、会話が始まってから決めるのではなく、『あらかじめ決めておくともスムーズになるよ』と言っておくとも会話がよりスムーズに開始するのではないのでしょうか。 学生 K.Y. 事前に何を話すか、話題を考えてから取り組んだ方が時間のロスが少ない。 学生 M.H. ない。 学生 O.A. 自由に話せるのでグループにより個性が出ていいと思う。また、日常生活でも友だちとは話題が決まっているわけではないので、より日常生活に近い会話ができたと感じる。</p>
<p>質問 14：その他コメントがあれば書いてください。</p>
<p>学生 K.R. (無回答) 学生 O.Y. (無回答) 学生 K.Y. とても楽しかったです。相手の日本語が流暢で、いい刺激をもらいました。またこのような機会があれば参加したいです。 学生 M.H. (無回答) 学生 O.A. また同じようなプログラムがあれば参加したいと考えます。</p>

まず質問 9、質問 11、質問 12 について、三重大大学の参加学生全員が、この VE 会話練習を楽しむことができ、満足し、事前アンケートに書かれたような不安は不要であったと回答した。また質問 10 の結果から、参加学生全員が、この VE 会話練習が自身の英語能力向上に役立ったと考えており、具体的には、英語母語話者との会話に対する慣れ、英語での会話の楽しさ、英語学習や英語での会話に対する意欲の増進などの心理的な効果が多く挙げられるとともに（学生 K.R.、学生 O.Y.、学生 M.H.、学生 O.A.）、発音、聞き取り能力、英語表現などの語学学習上の効果を挙げる学生もいた（学生 M.H.、学生 K.Y.）。

質問 13 は、今後同様の取り組みを実施するにあたっての注意点等を聴取したものであるが、二人の学生が「あらかじめ話題を考えておいた方が良い」とする一方、一人の学生からは「あらかじめ話題を決めていない方がより日常会話に近い会話ができる」と回答している。質問 14 の自由記述コメントに関しては、二人の学生（学生 K.Y.、学生 O.A.）が、今後同様の取り組みがあれば参加したい旨を記している。さらに学生 O.Y. と学生 M.H. も、このアンケートを添付して提出したメールの本文の中に、今後同じような機会があれば連絡が欲しいと書いている。

4. まとめと結語

本稿は、日本人学生と米国大学の学生が、それぞれ英語と日本語の能力の上達を目的とし、Zoom での会話を行った VE 活動を紹介し、またこの活動が三重大大学の参加学生に与えた感想および効果を報告したものである。参加学生に対するアンケート調査の結果、学生たちがこの VE 活動を楽しみ、英語学習についての心理的または語学的効果を得られたことが示唆された。また、学生 S.R. は、最初の指示通り各回につき日本語 20 分、英語 20 分の会話をしたようであるが、「もう少し英語で話したかった」と感想を記していることから（質問 11）、三回の会話練習だけでは物足りなかったと感じているようである。一方学生 O.A. は、会話の相手の米国大学生と連絡先を交換し、今後も連絡を取り合うことを提案していることから（質問 9）、今回の取り組みが個人的な交流関係を築くきっかけになった可能性がある。

今回、この VE 活動に三重大学生が参加したのは初めてであったことは前述の通りであるが、参加学生の声により、今後も継続して参加する価値があると判断する。まずは来年度、三重大学からの参加学生枠を 10 名に増やし、さらに将来的には会話練習回数が 7 回のグループに振り分けてもらうことも視野に入れたい。

参考文献

池田佳子 (2016) 「「バーチャル型国際教育」は有効かー日本で COIL (Collaborative Online International Learning) を遂行した場合」『国際交流』vol.67, 1-11.

池田佳子 (2020) 「ICT を活用し海外の学生と行う国際連携型の協働学習「COIL」の教育効果と課題」『大学教育と情報』vol.171, pp.20-25.

国際教育研究コンソーシアム (2020) 「第 3 回国際教育のスピリットを取り込もう! Virtual Exchange (COIL) を超短期間でも取り込む手法ワークショップ<報告> 池田教授による日本語版解説」(<http://recsie.or.jp/wp-content/uploads/2020/05/8602954c088550321db1ae29de894d4f.pdf>)

SUNY COIL (2019) Center Faculty guide for COIL course development (version 1.5) (http://www.ufic.ufl.edu/uap/forms/coil_guide.pdf)

IiBC 一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 (2020) 「TOEIC® Program DATA & ANALYSIS 2020」(https://www.iibc-global.org/library/default/toEIC/official_data/pdf/DAA.pdf)

三重大学国際交流センター紀要 [投稿規定]

2014年3月13日改定
国際交流センター運営会議

1. (名称及び目的)

本紀要の名称は『三重大学国際交流センター紀要』とし、主として三重大学や三重県内の地域社会において実施する国際教育、国際研究、国際交流、語学教育に関わる内容の、研究論文、研究ノート、調査報告、実践報告、書評等を発表する場を提供することを目的とする。

2. (編集委員会)

三重大学国際交流センター内に、三重大学国際交流センター紀要編集委員会（以下、編集委員会）を置く。編集委員会は、三重大学国際交流センターの専任教員1名と学部選出の委員1名（いずれも任期1年）によって構成され、内1名を編集委員長とする。編集委員会が国際交流センター紀要の出版に際し、すべての責任を負う。

3. (投稿資格)

本紀要への投稿資格は、三重大学に勤務する専任教員あるいは非常勤教員であることを原則とする。但し、編集委員会が特に認めた場合はこの限りではない。

4. (原稿規定枚数)

原稿の枚数は、研究論文、研究ノート、調査報告、実践報告については、原則として13枚（1枚＝40字×32行、ただし20%の増減を認める）、書評については3枚以上9枚以内とする。図表、写真等も規定枚数内に含める。

5. (使用言語)

本紀要に掲載する研究論文、研究ノート、調査報告、実践報告、書評等は、日本語または英語で執筆したものとする。執筆の詳細は「執筆要領」に別途定める。

6. (原稿論文等の採否)

投稿された原稿については、編集委員会にて以下の審査を行った上で採否（条件付き採択を含む）を決定し、投稿者に通知する。

- (1) 投稿原稿の内容が、本紀要の発刊趣旨、対象領域に合致していること。
- (2) 投稿原稿の構成、文体が紀要にふさわしく、投稿規定に則っていること。
- (3) 未発表であること、論文作成にかかる不正がないことが誓約されていること。

尚、原稿の種別にかかわらず、当該学術領域の専門家による内容評価は行わない。

7. (投稿の受付)

編集委員会は投稿申込みおよび原稿提出の締切を定める。締切日までに提出され、採用された原稿は、原則として当該年度の号に掲載する。

8. (論文等の公開)

掲載された研究論文等は、原則として電子化し、インターネット上でも公開する。

本規定は 2014 年 4 月 1 日より運用を開始する。

三重大学国際交流センター紀要 [執筆要領]

2011年6月15日改定

国際交流センター紀要編集委員会

1. 原稿は、A4用紙を使用し、マイクロソフト・ワードで作成する。

[和文の場合] 1頁：一行40字×32行

[英文の場合] 1頁：32行（行数のみ指定・1行の文字数は指定しない）

[ページ余白]（和文・英文とも）上下左右30mm

2. 注は、⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾のように本文中に通し番号を付け、脚注または後注とする。

3. 引用・参考文献は、著者名又は論文執筆者名、（当該著書刊行年又は論文発表年）、書名または論文名、出版社又は当該論文発表誌名、巻数及び頁数を記す。

【例】山田祐二（1995）『日本論』河人社

山本幸夫（1996）「日本の民間習俗」『〇〇大学紀要』vol.21、pp.30-42.

Riggs, Fred W. 1966) *Thailand: The Modernization of a Bureaucratic Polity*.

Honolulu, HI: East-West Center Press.

Psathas, G. (1986) The organization of directions in interaction, *Word*, 37 (2), pp. 54-66.

4. 原稿は、次の順序で執筆する。

[和文の場合]

- ①論文名と執筆者名（日本語）
- ②論文名と執筆者名（英語又はその他の言語）
- ③要旨（英語又はその他の言語で200語以内）
- ④キーワード（日本語で5語以内）
- ⑤本文
- ⑥後注
- ⑦引用・参考文献

[英文の場合]

- ①論文名と執筆者名（英語）
- ②要旨（日本語で400字以内）
- ③キーワード（英語で5語以内）
- ④本文

⑤後注

⑥引用・参考文献

5. 執筆者は、次のものを期限までに提出する。

①打ち出し原稿（A4用紙に印字）

②原稿の電子ファイルを記録したUSBメモリー・スティック

（USBメモリーには執筆者名を記し、ファイル名は「論文名＋執筆者名」とする）

6. 校正は、執筆者本人が再校まで行う。校正段階での内容の変更は認めない。

執筆者一覧

三重大学国際交流センター

福岡昌子 教授

松岡知津子 准教授

正路真一 助教

マホニー, ブライアン ジェームス 非常勤講師

三重大学教育学部

神山英子 特任講師

三重大学教養教育院

奥田久春 特任講師

ホーチミン市師範大学日越文化・教育センター

ガー, レティホン 職員

ホーチミン市師範大学日本語学部

チー, カオレユン 講師

編 集 後 記

『三重大学国際交流センター紀要』第17号（留学生センター紀要より通巻第24号）をお届け致します。今回は、研究論文2本、調査報告2本、実践報告2本の合計6本となりました。内容は、技能実習生や外国人留学生との関わり、地域的な祭りに見られる日本文化、そしてコロナ感染のリスクを避けるためにバーチャル形式で実施された研修や授業など、多岐にわたる充実したものとなっています。

終わりの見えない世界的パンデミックにあって、外国人留学生の渡日および日本人学生の海外渡航が制限され、国際的な交流活動が難しい状況が続きますが、こういった環境の中本学が取り組む国際的な研究活動・実践活動をお伝えしております。

次年度も国際交流センターホームページにて論文を掲載して参ります。引き続きよろしく願い致します。
(正路真一)

三重大学国際交流センター紀要 第17号（通巻第24号）

2022年3月31日 印刷

2022年3月31日 発行

編集委員：正 路 真 一（国際交流センター）

発行者 三重大学国際交流センター

〒514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577

印刷所 伊藤印刷株式会社

〒514-0027 三重県津市大門32-13

TEL 059 (226) 2545 FAX 059 (223) 2862

BULLETIN

OF

CENTER FOR INTERNATIONAL EDUCATION AND RESEARCH

MIE UNIVERSITY

Vol. 17

Contents

Articles

A Consideration about technical intern trainees working in nursing care and welfare facilities:

- From the point of view of Contact situations KAMIYAMA Hideko (1-14)
公的儀礼行為と精神的昇華：関宿の祭りと「フロー」… ブライアン ジェームズ マホニー (15-26)

Research Reports

International Exchange and Regional Internationalization through

Bon Festival Dance Involving International Students and Local People

- Conclusions from a Questionnaire Survey — FUKUOKA Masako (27-40)

Research on Students' Opinions on Class Formats under COVID-19 impact:

- On-demand, Hybrid, or All Online Real-time Classes SHOJI Shinichi (41-53)

Practice Reports

Mie University Vietnam Field Study 2020 Performance and Future Prospects

- MATSUOKA Chizuko, OKUDA Hisaharu, CAO Le Dung Chi, LE Thi Hong Nga (55-67)

Virtual Exchange Project of English-Japanese Conversation Practice by

- Japanese and American University Students SHOJI Shinichi (69-80)

Information on Subscription of the Bulletin (81)

Instruction to Contribution (83)

Authors (85)

Postscript by the Editor

CENTER FOR INTERNATIONAL EDUCATION AND RESEARCH
MIE UNIVERSITY

2 0 2 2